

特216
265

勇士杉山曹長の面影

(日記と書簡)

始



特 216
865

341-184

座右銘

- 一 向上ノ一途ニ終止ス
- 一 真剣ノ前ニ不能ヤシ
- 一 長所ト交ハシ悪友トシ
- 一 論ヲ負テ行テ勝テ
- 一 己ニ克テ人ニハ譲レ
- 一 上見テ進メ下ミテ憐ケ
- 一 感謝ノ處老ニ不平ヤシ
- 一 誠ヲ渡シハ苦ノイセノ中
- 一 明イ道ヲ明ク渡レ
- 一 神ノ前ニ立ツ心ヲ世ヲ渡レ
- 一 沈_シテ_シ度_スト_シ浮_ンテ_シ倉_トシ

歩兵曹長杉山英氏と

同氏の座右銘



さくら花咲けば思出づ其の花の散るにも似たる君の最後を
 敷島の大和男の子の名に映えて花と匂へり君が動_{いた}し
 故郷の富士ヶ嶺高く君の名と永久に消ゆまじ白雪の色



儀葬の長曹山杉

昭和七年二月九日、今日しも静岡市英兵會施主となりて故杉山曹長の葬儀が行はれる悲しみの日である。
 天も心あつてか朝来雲低く垂れ、今更に勇士の死を悼むやうに思はれた。午後二時といふに、柳新田の生家を出た概は多くの人に護られて、所定の式場たる安東小學校に着く。校庭には儀仗兵が整列し之を迎へる。忠魂碑前に設けられた祭壇の中央には、在りし日の曹長の姿を偲ぶ肖像が黒リボンで蔽はれ、忠源院義山哲英居士の位牌の色も新らしく、一段高きところには畏くも、兩陛下御下賜金が飾られて赫々たる故人の武勳を語る。位牌の左右には閑院宮參謀總長、荒木陸相を始め將校婦人會、安東小學校職員、同校児童保護者その他よりの供物うづ高く、祭壇兩脇に田中本縣知事、宮崎静岡市長、若山第三師團長歩兵第三十四聯隊等より射られた三十餘個の花輪、静岡英兵會長、市會議員等からの生花十餘個、所せまきまで連ねられ、校庭を埋める會葬者五千餘人寂として聲をのむ。
 午後二時十八分、第一鈴を合圖に天徳院安井貫悟住職導師となつて懇ろに讀經、終つて市長、若山師團長(代讀)、縣知事、高田第二十九旅團長、佐枝歩兵第三十四聯隊長その他二十餘通の弔詞がのべられる。次いで杉原安東小學校長立つて、藏重安東守備隊長より故曹長の戦死を報じたる書簡を朗讀。眞情こもれる同隊長の文面に君の面目躍如として眼前にみる如く、朗讀進むにつれ満場水を打てるやうに静まり、その壯烈なる最後に至るや讀む人も聽く人も感無量、嗚咽の聲は諸所に起つた。
 かくて參謀總長の宮、陸相、獨立守備隊靜岡出身兵一同その他各所よりの弔電朗讀。再び僧侶の讀經に移つて、喪主、親戚、會葬者の燒香があり、葬儀委員長、喪主の挨拶を以て、意義深くも盛大な曹長の葬儀は終つた。
 時に午後四時半、梅蒸る二月の空暮色せまり勇士の靈を安らかに護るかと思はれた。

一月二日

朝起床と共に銃劍術の初めをなせり、本年も吾等武人は此の氣合を以て進まん、それより書初をなす

熟慮断行を余の座右の銘として本年を過さん、正に活動の春伸びよ高く、向上の一路に終點なし

勅 題 社頭之雪

曉來飛雪白 神廟鐸鈴鳴

新歲祈何事 遙聞拍手聲

曉來飛雪白 神廟鐸鈴鳴
 新歲祈何事 遙聞拍手聲

昭和六年書初と

同日誌



目次

步兵曹長杉山英氏と同氏の座右銘……………一
 昭和六年一月二日書初と同日誌……………二
 杉山曹長の葬儀……………三
 一、杉山英略年譜……………八
 二、杉山曹長と本書發行について……………九
 三、悲報來る……………二二
 四、安東守備隊長より兄鶴吉へ曹長の奮闘勇死の状況の報知……………二二
 五、同守備隊長より同勝岡市安東小學校長杉原二郎へ曹長の人物
 及勇死の状況報知（昭和七年二月一日）……………二三
 六、軍隊生活時代（安東小學校訓導野島英一稿）……………二六
 七、滿洲事變從軍記（自昭和六年九月十八日至七年一月十三日）……………三〇
 八、同氏昭和六年日記（一月より九月迄毎月一部抽出）……………三七
 九、同氏書翰……………三三

發行所寄贈本

1、横須賀鎌倉地方旅行日より（大正十四年七月十四日義兄松澤賢次郎
 方にて同郷友人渡邊美代志宛）……………一
 2、兄へ送金爲替不着の問合せ（大正十五年十一月十六日）……………三四
 3、同郷の友人青島源作へ日露戦争の記念に紅葉一葉を封入し
 送る（昭和二年七月四日）……………三四
 4、同人へ壯丁検査合格を喜び青年訓練所に精勵を勸む（同二年十
 一月日時不明）……………三五
 5、義兄伊東鈴男等へ寫眞を贈り又實印調製につきて問合せ（昭和
 三年一月頃）……………三五
 6、自己の誕生日に兄へ（昭和三年二月四日）……………三五
 7、友人青島源作が安東守備隊入營につき同人父彌喜へ軍隊内
 の状況を述べ且祝詞と慰問（同三年五月十九日）……………三五
 8、兄へ兒童教育を注意し懇なる眞情の吐露（同三年十一月九日）……………三六
 9、兄へ銃劍術試合の優勝の報と記念寫眞を送る（同四年三月十二日）……………三六

- 10、鞍山の野營地より郷里宿元へ勤務情况等を述ぶ（同四年十月十一日）……………三六
- 11、兄の子春子、二郎等別々に年始状を送る（同五年一月元日）……………三七
- 12、兄へ土産の禮狀（同五年二月十一日）……………三七
- 13、友人川島三郎の新婚を祝し自己將來の希望を述ぶ（昭和五年三月八日）……………三七
- 14、郷里の友杉山廣へ（同年三月二十五日）……………三七
- 15、昭和五年四月九日歸省同月十九日渡滿後兄へ寄す（昭和五年五月四日）……………三六
- 16、旅順より兄へ奉天旅順見學の知らせ（同年五月七日）……………三六
- 17、下士志願について兄へ（同年六月四日）……………三六
- 18、兄等へ暑中見舞ひ（同年七月二十二日）……………三六
- 19、兄長女雪江へ教訓の書翰（同年二月二十日）……………三六
- 20、近況を記し兄に寄す（同年七月六日）……………三六

- 21、兄へ時候見舞ひ（同年十一月七日）……………三六
- 22、兄へ伊豆震災の間合はせ（同年十二月初め）……………三六
- 23、織母イマに寄せたるもの（昭和五年末）……………三六
- 24、兄へ時候見舞ひ（昭和六年二月二十五日）……………三六
- 25、友人伊藤惣作外數人滿洲本溪湖守備隊へ入營前四人に寄す……………三六
- 26、婚約に關し義兄伊東鈴男に寄す（昭和六年七月七日）……………三六
- 27、同伴につき兄へ（同年四月同日）……………三六
- 28、姉ナオの窮狀を聴き兄に訴ふ（同年九月十日）……………三六
- 29、日支事變勃發直前燃ゆる至情よりの感想を述べて郷里青年團を戒む（昭和六年九月十五日）……………三六
- 30、同村より出兵せる友人伊藤惣作の動靜及事變一般を其父源太郎に告げて懇に慰む（昭和六年九月二十日安東より）……………三六
- 31、從兄岩崎伯次郎へ（昭和六年十一月二十日同所）……………三六
- 32、郷里青年團、在郷軍人會に皇軍の狀況及其意氣を報し國論……………三六

- 統一を促がす（同年同月二十五日安東より）……………三六
- 33、郷里青年團の慰問品禮狀（昭和六年十二月十四日）……………三六
- 34、安東小學校長杉原二郎の慰問に答ふ（昭和六年十二月十二日郷家屯より）……………三六
- 35、群馬縣沼田町板山莞爾の慰問に對し禮狀（昭和六年十二月十二日郷家屯より）……………三六
- 36、横須賀市義兄松澤慶次郎夫妻に出動部隊の艱苦を述ぶ（昭和六年十二月十八日郷家屯より）……………三六
- 37、東京市淺草區猿屋町一七村田藤子へ郷家屯より慰問品の禮（同年十二月十六日）……………三六
- 38、同市同區田町竹内産婦人科院永島喜美子へ同所より慰問の禮（同年同月同日）……………三六
- 39、静岡師範學校生徒杉山春彦及同校生徒へ（同年同月十九日同所……………三六

- 40、遙に郷家屯より燃ゆる愛國の至誠より郷里青年團員の滿蒙へ渡航を奨む（昭和六年十二月二十一日）……………三六
- 41、郷里安東小學校高等科本田、加藤兩兒童等の慰問に答ふ（同年同月二十日同所）……………三六
- 42、同校尋常科第六學年女組受持教師へ慰問の禮狀（同七年一月元日同所）……………三六
- 43、同校第六學年女子中島等へ寄す（同年同月同日同所）……………三六
- 44、郷家屯より同郷友人渡邊美代志へ滿洲近況の知らせ（同年十二月二十三日）……………三六
- 45、兄の兒供等へ年始状（同年同月同日安東縣より）……………三六
- 46、從兄岩崎伯次郎へ洮南より（昭和六年十二月十四日）……………三六
- 47、同曹長絶筆兄鶴吉へ（同七年一月十七日安東縣より）……………三六
- 48、安東縣朝日小學校田中満子へ（昭和六年十二月）……………三六
- 一〇、賞 狀……………三六

杉山英略年譜

明治三十八年二月四日 靜岡縣安倍郡安東村柳新田(現今靜岡市柳新田町)九百六十三番地に三男三女の末弟として生る 一歳

父 松太郎

母 山田イヌ

長兄 朋太 夭折

次兄 鶴吉 家を嗣ぎ安倍郡西野田村曲金中村淺吉長女クラを娶り三男三女を擧ぐ

長姉 ナオ 靜岡市傳馬町望月勇藏に嫁し三女を擧ぐ

次姉 エツ 横須賀市深田町松澤賢二郎に嫁し一男を擧ぐ

三姉 タキ 安倍郡千代田村伊東鈴男に嫁し二男一女を擧ぐ

明治四十二年一月十三日 母イヌ死亡

以後七歳まで長姉ナオに養育せらる

明治四十四年四月一日 安倍郡安東小學校入學 七歳

同年 靜岡市中田、落合市藏妹イマ繼母として入嫁 同歳

大正六年三月廿五日 同校尋常科卒業 十三歳

同年四月一日 靜岡縣安倍農學校入學 同歳

同年九月廿五日 父松太郎死亡 同歳

大正九年三月 安倍農學校退學 同歳

同年四月 靜岡市立商業學校入學志願 入學試験不合格 同歳

以來 徴兵適齡迄家にありて農業を手傳ふ 廿一歳

大正十四年四月 安東村青年團柳新田支部長に推薦せらる 同歳

大正十四年五月 海軍兵志願眼病の爲め不合格 同歳

大正十四年六月 壯丁検査甲種合格 同歳

大正十五年一月十日 歩兵三十四聯隊第十一中隊入營 同歳

同年四月四日 滿洲獨立守備歩兵第四大隊へ轉屬 同歳

同年四月十三日 滿洲安東縣獨立第四大隊第四中隊編入 同歳

大正十五年五月 安東縣朝日小學校に於て滿鐵囑托につき支那語學習 同歳

同年十二月一日 歩兵一等卒 同歳

昭和二年七月三十一日 歩兵上等兵伍長勤務 同歳

昭和二年七月卅一日 輕機關銃手 同歳

同年十一月廿日 支那語二等通譯 同歳

同年十二月一日 歩兵伍長 同歳

昭和三年一月廿七日 獨立守備歩兵第四大隊長より銃劍術成績優等の賞状を受く 廿四歳

爾後數度同様の賞状を受く

昭和三年十月廿六日 獨立守備歩兵第四大隊第四中隊長より射撃優等證を受く 同歳

爾後數度中隊長大隊長等より同様の賞状を受く 廿四歳

同年十二月一日 歩兵軍曹 同歳

同年同月一日 支那語一等通譯 同歳

昭和四年四月九日 賜暇歸省四月二十二日渡滿歸隊 同歳

昭和五年二月 安東縣陽明學院米山朴堂につき書道學習 同歳

昭和六年三月十一日 勳八等瑞寶章 廿六歳

昭和六年九月十八日 日支事變起り内蒙古其他各地に出動 同歳

同年七月十八日 匪賊討伐の爲め滿鐵安奉沿線湯寶城にて戦死 廿七歳

同年同月同日 歩兵曹長 廿八歳

杉山曹長と本書發行について

杉山曹長名は英、君は明治三十八年二月四日、靜岡縣安倍郡安東村字柳新田、現今靜岡市柳新田町に杉山松太郎の三男として生れた。母はイヌ、長兄朋太は夭折したので次兄鶴吉が家を嗣いだ。姉は三人あつて夫々他に嫁したのである。五歳で母に別れたが七歳の時、父松太郎は同市落合市藏妹イマを後妻として娶つたので、君は此の繼母に愛育せられ成人したのである。英氏は實の母の如く親み其恩を忘れず之に報いんが爲めに心を盡し常に老いたる母を慰め、後年滿洲出動中に屢々贈り物などしたることが其書簡に見ゆるのである。

居村安東小學校尋常科卒業と同時に安倍農學校に入り居る事三年、思ふ所あつて中途にて退學し靜岡商業學校に入學せんと志せしも入れられず。其後家にあつて専ら自家の農業を手傳ひたるが大正十四年六月壯丁検査に甲種合格して翌大正十五年一月靜岡歩兵第三十四聯隊に入營し第十一中隊に編入せられたが同年四月滿洲獨立守備歩兵第四大隊に轉屬する事となり、滿洲安東縣駐屯の歩兵第四中隊に編入せられたのである。爾後八年同隊に勤務し昨年九月十八日日支事變勃發後直に同隊と共に安東地方の兵匪武装解除に従ひ、後吉林に或は洮南に或は四平街に又鄭家屯等の各要地の警備に當つた。昨年暮安奉沿線が兵匪の襲撃に會ひ同地の危険となるや、安東縣の本隊に歸り本年一月以來専ら同地方の警備に當つたが、一月十八日同沿線湯寶城の兵匪討伐に當り、名譽の戦死を遂げたのである。其際敵の包圍を受け隊長の命のまに、高地の占領の爲めに硝煙彈雨の間を敢然突撃を行ひ、前途有爲の身を以て敵弾に左胸肺部を貫通され「後を頼む中隊長に宜しく」との數語を遺して空しく戰場の露に消へたのは惜みても猶ほ餘りがある。別項記載の其戦況を記したる藏重中隊長の兄鶴吉氏及杉原安東小學校長に送れる書簡は君が勇往邁進、能く上官の命に服し壯烈果敢に奮闘したる勇姿を目前に視る思ひがする。藏重大隊長の云へるが如く「後を頼む中隊長に宜しく」との數語は日支事變の將來を思ふときに、獨り皇軍のみならず吾等全國民が心衷に銘すべき深長の意味を包含するものであるまいか。近時上海附近の蕪江鎮の戦ひに爆彈を抱ひて敵壘に突入して戦死せる三勇士の物語は全國民の深く感激する所で、新聞に雜誌に劇に果た活動寫眞に演ぜらるゝのである。其壯烈の戦死は我兵士の忠勇義烈を後世に傳ふべきもので、世界戦史に特記すべき我大和魂の權化であるに相違ないが杉山曹長の場合に於て其戦況を見ると時に同氏が一死報國の念が燃ゆるにあらざれば爲し得ざる事だ彼れとは兄弟がないやうである。實に吾が軍の強きは能く皇軍の目的を確信して死を見る歸するが如くあるからである。此言葉は支那の古聖の言葉ではあるが我が將校下士卒の一死報國の誠を盡す爲めに言つたやうに見えるのである。杉山曹長は平素に於ても君の日記、書簡に示すが如く實に其生活は模範的であつたのである。氏が本縣出身の軍人中今回の事變に於て最先の犠牲者で、全縣民に其戦死が同情せられ卷頭の寫眞に示すが如く其葬儀は本縣未曾有の盛儀で、畏くも兩陛下は祭料を下賜せられ當地方官民各階級男女參列者は五千餘名を算へ廣き安東小學校の校庭も立錐の地なく、數多の吊詞吊電等靈前に供へられ、其他供物花輪の如きは高貴以下大官名士の人々に贈られ參列者は誰言ふとなく杉山曹長は死して餘榮ありと語り合つた程である。君の崇高なる精神は永劫に傳はるべく又吾等は之を傳へねばならぬのである。君は立派なる軍人であつた。實に君は模範軍人であつた。單に軍規に服し勤務に努むるのみでない。中隊長が云へるが如く同大隊中優秀なる射手であつた。銃劍術の達人で、其技倆が拔群であつたことは本書巻尾に載する數度の賞状が最雄辯に物語つて居る。君は個人として好恰の軍人であつたのみでなく部下の最も敬慕する有情有徳の士であつた。藏重中隊長の杉原氏宛書翰の此一節を余は幾度か繰返して讀み感激したのである。

部下を愛する事子の如くありし君に對して兵士達は何れとなく相談し君も亦よく面倒を見つ、有之候戦死の前は毎晩の「ラデオニュース」を廊下の黒板に書き、兵士達に讀み得る様に致し居られ候兵士達は多忙で「ニュース」を聞く暇もたきを氣の毒に思ひし君の同情心の發露に有之候
一月十八日夜君の英霊を護りて中隊に歸りし時、廊下の黒板には前日忙はしい間に書きし「ニュース」が其儘残り居候
何時とはなしに廊下に集まりし兵士達は黒板を見て
「是が杉山軍曹が書かれたのだ」

と何時迄も見入り居候 是れ等も兵士達が故人を仰慕しある事の一端の現はれかと存じ小生も目頭の熱さを覺へ候

是は君が部下兵士達に對する有情の一端を物語るものでなくて何んであらう。實に君は部下統率する立派なる幹部であつたのである。余は戦軍忙はしき間認めたる別項記載の従軍日記、又平素の日記を見て君の努力修養を知りて更に敬服したのである。周密なる注意を以て事務を見て其勤めを怠らざるのみならず支那語を學習するの必要を感じては里餘の途を遠しとせず軍務の餘暇に夜々通學し學習に務めたる如き、又書道を學ぶの必要を覺りては簡に就き之を學び常に習字を怠らなかつた。卷頭掲ぐる君の筆跡は昭和六年一月二日の書初めのものにて天晴の出来である。讀書は君の最も力むる所であつた。數度の戦争に従軍して戦功を立てたる某老將軍が此筆跡を見て歎稱し又従軍日記を見ては平素の日記はさる事ながら戦争中毎日日記を書くことは誠に困難で、自分は幾度か書いて中絶した。戦死前一週間迄で事變勃發後最も委はしく書き記したるは其心掛のほど奥床かしい。其文章は簡にして要を得能く君の毎日の務め向きや爲すべき事を最も正しく行つたかを見る好資料たるを失はない。其日記中には定まり文句のみでなく君の眞情を吐露したる跡が歴然として見へるのである。唯従軍日記のみならず平素の日記を毎年記されたる如きも不幸にも昭和五年のものに見當らないが、毎日の記事に君の修養、反省、覺醒等が記されてあるが戦時事變に當りて勇猛精進する君にして斯くまで綿密に周到に細心に行動されたかを見る時に益々敬服せざるを得ない。君の最終の學校教育は安倍農學校の三ヶ年で今日の我國多數の少青年の教育程度と大差はないのである。即ち全國の補習學校、青年訓練所、青年團員と異ならざるものである。農學校在學中の成績は別に優秀でなかつた事は同校教師等の語る所である。アレ丈の人物になつたのは如何にしたのであらうか。君の日記にあるが如く自發的に努力した賜物である。全く努力の結晶である。君の座右銘と日誌とを併せ讀むときに背かれるのである。心裏に燃ゆる純情と勇氣とは君を玉成したのである。君の生涯は二十八年に過ぎないが軍隊内にありては理想の軍人たらんとして此の純情と勇氣とを以て理想を能く實現して忠勇の軍人となつたのである。外にありては親に仕へて孝を旨とし、兄弟に對しては愛敬の誠を致した。其友に交はるには信義を以てし未家庭をなすには至らざりし君が結婚に對する見識は婚約に關して二通の書簡に見へるが如く細心に注意し總て婚約は合理的になすべきの決意を有せられたことが窺はれる。今日青年男女の戀愛問題の喧しき時に君によりて斯る正當の意見を聴くのは以て範とすべきである。余は日誌及書簡等を見て君の生活は軍人としては吾が傳統の大和魂を中心としたる軍人勅諭を實現し國民としては教育勅諭を文字通りに實現せし事を敬服して羨望の至である。君の如き人を吾々が同胞として有ては實に静岡縣民の誇であるのみならず全帝國民の誇であるまいか。實に君は平凡の偉人、無名の英雄でありと言ふも決して過稱でないと思はれるのである。

君は斯る崇高なる人物であつたので自然本書發行の趣旨も明である。余は年次を経るに従ひて、斯る崇高なる無名の英雄の逸事行績等の記録が煙滅するを恐れたので、此際其遺品等は最も鄭重の保存の方法を遺族に勧めると共に兄鶴吉氏を初め親族、母校たる安東小學校長杉原氏其他友人故舊に謀り書簡日記等を蒐集し本書を編纂したのである。現今の教育は家庭に於て、學校に於て児童生徒の個性を認め其特長を伸ばすことに餘に力を入れて居ないやうである。是は現今の教育の缺陷であるやう思はれてならない。

然るに杉山曹長は最も良く適才が適所に向つたる實例であつて學校及家庭教育の恰好の参考資料であるからである。又児童生徒を教養するに當りて徒に教材注入に日も足らず全く試験責めで學修せしめ児童生徒を自から勵み自奮自修せしむる工夫が足らないが、杉山曹長は自己に反省して自から努力し學校に於ては平凡なりし君は軍隊生活にありて拔群の成績を現はした事は吾等教育者に考へさせられる。現今修身教育は堂々たる偉人英雄の生活を物語りて教訓とするために、多く假空的でピツタリ児童生徒の生活に當てはまらない。杉山曹長は平凡の偉人で、其實踐躬行の生活を児童生徒に見聞せしめ味はしむるは自分の生活のレベルより反省する事が出来て、感激することが特に深いやうに思はれる。現今教育は抽象的概念論に傾いて居るがモット具體的に個々實例を示して児童生徒に其實踐を奨励すべきで其見地から君の日誌、書簡は好材料である。今や全國陸海軍の兵士、補習學校、青年訓練所、青年團員は幾百萬人を算ふるが彼等の讀物とし好同伴であると信じたので費用が許すならば尠くとも本縣の是等の人々に編者は寄贈したいが事情が許さないので、是等の各關係者に數部を贈ることとした。是等の方々で入用の人には實費一部貳拾餘で増刷にして御願したい。又色々の都合で日誌、書簡等も全部を掲載するを得なかつたことをも御断はりする。終はりに本書編輯に當りて兄君鶴吉氏及安東小學校長杉原氏初め同校職員各位の斡旋の勞を感謝する。

悲報來る

昭和七年一月十八日午後三時安東獨立守備隊長から
スギヤマグンソウノシライタムイサイフミ
の電文を手にした家人は勿論、郷黨の驚愕一方ならず、今迄の緊張も俄に力抜けして其の言ふ處を知らなかつた。

安東守備隊長から令兄鶴吉氏へ

滄沱頰を傳ふ涙を拭ひつゝ此の書面を認め申候 先日小生儀部下中隊を指揮して湯寶城方面へ兵匪討伐に赴き申候ひし際頑強なる敵と衝突激戦の後敵に大打撃を與へ申候も其の際御令弟英君は名譽の戦死を遂げられ申候以下御戦死の状況を御報知申上候
十八日午後十一時湯山城驛より紛々たる降雪を衝いて匪賊の根據地湯寶城に向ひ申候拂曉目的地に到着仕り敵の寢込を襲ひて大打撃を與へ申候
御承知の如く強者に弱く弱者に對しては急に強さを増し申候は支那兵の常に御座候が其の例に洩れず一旦四圍の高地に逃走したる敵は日本軍の兵力小數(約六十)なるを察知し己れの多數(約四百)なると地利を頼み摺鉢の底の如き位置に在る我が軍に對し俄然急敵の如き猛射を浴せ申候刻々戦況は悲惨の度を加へ申候 座して止まらば全滅は火を見るより明かにして退却はもとより執るべき道に御座候はす熟考の末一部を以て最も頑強にして最も險峻なる高地による敵に向はしめ主力を以て他の敵に對し猛烈なる攻撃前進を敢行する如く決心致し申候
陛下の赤子を死地に投ずるは情に於て忍びずさりとて投ぜざれば主力を如何にせん今は躊躇すべきに非ずと決心仕り溢れんとする涙をおし隠し平素最も信頼する御令弟に此の重任を命じ申候必死の決意もの凄く卒先頭を立てる御令弟は劍電彈雨の間を躍進又躍進見る間に目的地に達せんとせしに何んたる事ぞ一彈は飛び來つて左胸肺部を貫き「後を頼む、中隊長殿に宜しく」の數語を残して壯烈なる御最後を遂げ申候
斯くして御令弟の血を以て得たる高地の奪取によりさしも頑強なりし敵も散を亂して退却を始め申候
劍術に射撃に角力に武に於ては第四大隊中比肩すべき者なく加ふるに 頭腦飽く迄明晰將來は將校にと繁忙なる軍務の傍ら汝々として勉勵しつゝありし實に洋々たる前途を有する御令弟を亡くし茲に深く深く御詫び申候
不徳なる小生に對し最後迄宜しくと信頼せられ候御令弟英君と朝には笑つて共に征途に就きしに眞紅の夕陽西山に没する頃間へども答へざる遺骸と共に歸る小生の苦衷も御察し被下度候
兵馬倥傯の間とは言へ御令弟の平戰兩時に於ける御功勞に報ゆる意味に於て後仕末萬端に對し萬全を盡し居り候
十九日假葬儀も滞りなく終へて本葬は安東公會堂に於て廿四日午後二時より佛式を以て盛大に執行する 豫定に御座候間其の點御心配遊ばされまじく候 葬儀終了後機を見て御令弟の吊合戦を執行する心算に御座候 小生生來の不文なれば筆は思ひに伴ひ不申候へども小生の貴殿に對する謝罪と故人に對する切々な

る愛情の情とを御諒察被下度候 面談の上御詫び申上ぐべきの處御渡滿遊ばされざるの事なれば亂筆を以て御詫び申上ぐるごと如斯に御座候 敬具
昭和七年一月二十日
安東守備隊長 藏 重 康 美

杉 山 鶴 吉 殿
二日ばかりすると此の手紙が届いた。中隊長の涙ながらの情報に皆目をしばたきつゝ、君の壯烈なる最後を知る事が出来た。君は信任厚き中隊長の命を受け率先陣頭に立つて劍戟彈雨の間を猿の如くに攀ち登り断崖上の敵に突撃した其の壯烈鬼神も途を避けし事であらう。

杉山曹長の戦死の状況及平素軍隊生活について

(安東守備隊長藏重康美氏より静岡市安東小學校校長杉原二郎氏へ 昭和七年二月一日付)

拜啓愈々御清榮の段奉賀候
先日は故杉山曹長の新聞記事御送付被下難有御禮申上候御蔭を以て君の郷里に於ける状況を詳知するを得申候
既に御承知かとも存じ候へ共杉山君戦死當時の概況左に御通知申上候
一月十七日には湯山城東北方約七方里、湯寶城に兵匪約二百名ありとの報に接し、更に將校を派遣して情報を蒐集仕り候處右の情報は略確實と相成候
中隊は之を討伐する目的を以て一月十七日午後九時十五分安東發同十時三十分湯山城着支那荷馬車二十臺に分乗して湯寶城に向ひ出發仕候
折柄雲行不穩なりし空よりは六花紛々たり將士は黙々として一路闇路を雪を頼りに行進仕候將士の胸中を往來する感想果して如何、
一月十八日午前七時半、湯寶城に到着下車して戦闘準備中に喇叭を吹奏して急遽集合する匪賊を發見中隊の志氣大いに振ひ申候
中隊は直に攻撃前進に移り湯寶城の村落を通過し北方高地に在りて猛射する敵に對して攻撃を開始仕候
敵の發射する彈丸は森林中の立木に命中して異様の音と共に樹枝を散亂せしめ身邊近き彈丸は物凄き「ウナリ」を立て、飛び申候も勇敢なる我軍は攻撃に次ぐに攻撃を以てし敵は多數の死體を戦場に放置して遠く北方に遺走仕候戦場にて押寄せし敵の小銃には血痕肉片の附着せるものあり、其遺留品多數有之敵の損害の多大なりしを想像仕候
敵を撃破して一先隊伍を整頓中「後方に在りし車輛が敵の襲撃を受けたり」との報に接し直ちに後方に引返し申候處車輛監視中なりし飯島上等兵以下の勇敢に依りて敵を撃退し幸に事なきを得申候
當時附近には一の敵影を見ず中隊は所期の目的を達成せしを以て歸隊するに決し一同車輛に乗りて行進を起し申候



死に臨みて君が残した最後の数語こそ眞に君の人格の發露と存候

「後を頼む 中隊長殿に宜しく」

これが鮮血と共に迸り出てた君の最後の言葉に有之候

満洲事變の將來を思ふ時君が「後を頼む」の語は私共に何を暗示するか、君の遺志を繼いで我等更に努力奮闘を期したる次第に御座候
君の尊き犠牲に依つて頑強なりし敵も逐次退却して戦ひは我軍の勝利に歸し申候、君の奮闘に依りて中隊戦勝の基を作られ候即ち君の武勳眞に拔群に有之候
君が生前諸上官に如何に信頼せられありしかは御寄附の新聞を見ても十分に窺知し得る所にして今更小生より兎や角申す必要もなき事と存じ候唯小生として
片腕を失ひたるかの如き感有之候を申上候

部下を愛する事子の如くありし君に對して兵士達は何くれとなく相談もし君も亦よく面倒を見つゝ有之候戦死の前頃毎晩の「ラチオニュース」を廊下の黒板
に書いて兵士達に讀み得る様に致し居られ候兵士達は多忙で「ニュース」を聞く暇もなきを氣に思ひし君の同情心の發露に有之候
一月十八日夜君の英靈を護りて中隊に歸りし時廊下の黒板には前日忙しい間に書きし「ニュース」が其儘残り居候
何時とはなしに廊下に集まりし兵士達は黒板を見て
「是れが杉山軍曹殿が書かれたのだ」
と申して何時迄も見入り居候、是れ等も兵士達が故人を仰慕しありし事の一端の現はれかと存じ小生も目頭の熱きを覚え候

然るに此の時高煥章なるもの、指揮する敵の増加隊到着し側方の高地より
我に對して射撃を開始せしを以て中隊は更に此の敵に對し攻撃せんとし
行動を起し申候
中隊が行動を開始するや敵は漸次其數を増し擧鉢の底の如き所に在る中隊
に對し四方の山上より射撃を加へ申候此の儘にしてあらんか徒らに損害を
招くのみなるを以て最も頑強なる敵を突破すべく勇躍前進を起し候も如何
せん四方よりする敵の射撃激しく止むなく僅少なる部隊を各方面に向はし
め敵の最も高地を占領すべく決心仕候然れども部下は是れ陛下の股肱を兄
諸彦の最愛の子弟に有之候これを死地に投ず情に於て眞に忍びざるものあ
りされど噫されど躊躇すべき秋に非ず茲に於て斷然意を決して部下分隊長
中最も信頼せる杉山君に托するに此の重任を以てす、君は命を受くるや率
先部下分隊の陣頭に立ちて鬼神の如く前進を起し申候時に飛彈愈々甚だし
君は將に所命の高地を占領せんとせし一瞬時天なる哉、命なる哉、一彈は
後方高地より飛來して君の背部より左頸部に貫通仕候而も攻撃精神旺盛に
て全身是れ精忠とも申すべき君は此の重傷にも屈せず更に數米を前進して
遂に斃れ申候

又故郷の兒童に優しかりし君は當地の兒童とも大變に仲善しにて戦死の報傳はるや兒童より君の死を惜む旨の來信多く小生の机上に積まれ申候又或一部の兒
童は各自若干宛を集めて香典とせしが如き優しかりし君の一端を知り得る事かと存候
申上度き事も未だ多くある様に存じ候へ共不文にして意を盡し得ず得難き部下を失ひたる小生の胸中御諒察願上候
眞に模範的の武人先輩とせらるゝ貴校の兒童諸子どうぞ杉山君を手本として立派な日本人になられんことを御祈り致し申候
杉山君の葬儀は一月二十四日當地公會堂に於て盛大に施行せられ本日渡邊軍曹をして遺骨を護送せしめ申候
本月六日頃神戸着の豫定に有之候何卒亡き君の爲に御祈り被下度候
年末筆失禮貴校職員兒童各位に宜しく御傳へ被下度御願申上候 敬具

軍隊生活時代

此稿は杉山曹長の軍隊生活を最も好く如實に示してある。静岡市安東小學校編「杉山曹長を憶ふ」より轉載

郷間に伍して、青年指導に専心努力しつゝ時を俟つてゐた君も二十歳の齡を迎へ徴兵検査の結果榮ある甲種合格となつた。君は愈々帝國軍人としての班列する事を得た喜びを友人に話して

「俺もよかつた。こゝで俺も奮發しなくちやならない海軍では眼でやられたが今度は通つた」

と喜んでゐたのはこの時の事である。

盛んな村人の見送りを受け、友人の送別を後にして八年前即ち大正十五年一月十日雄々しく勇ましく静岡聯隊第十一中隊に入隊したのである。

新兵として營内に營庭に忠實な勤勉な熱心な君は早くも上官より信を受け

た。淺間の山の上に櫻の花が咲き廿日會祭に市民の酔ふてゐるその年の四月三日、戦友七十二名と共に静岡驛を出發、同月十二日安東守備隊に入隊した。身を軍籍において立てようとした君はいち早く獨立守備隊に入隊を希望したのである。

それより去年四月九日初めて歸郷するまで故山を見ざる事、實に六ヶ年の長きに亘つたのである。

六ヶ年間に於ける軍隊生活に於て軍務に對する熱心と忠實機敏なる動作とは常に上官より注目せられてゐた。従つて階級の昇進はめざましかつた。

昭和二年四月三日には上等兵となり伍長勤務を命ぜられ同年十一月三十日伍長、翌昭和三年十二月一日には軍曹となり、現在においては大隊における最故參者として成績優秀、曹長に昇るのも近きにあつたと聞く。

初め射撃は君の得意とする所ではなかつた。いつの射撃にも不成績であつ

たために、他の戦友の外出する時にも自分獨り居残つて練習をなし夜と雖も常に念頭を去らず、或る時は泣いで悔んだこともあつたといふ。それが下士になつた頃には（それ程づまかつた）射撃も最早優秀射手になつたといふのは誠に熱心の結果に外ならない。

君は又同僚中稀に見る勉強家であつた。殊に近き中に士官學校に入學して將校たらんとするの希望を抱きつゝあつたためか殆んど深夜まで机に向ひ讀書研究にふけつてゐた。

又守備隊にては支那人と接觸應待のため支那語の研究の必要を感じた君は日中の勤務を終へるや約一里ばかりのところへ殆んど連夜、約九ヶ月間も通學したといはれてゐる、この點から見ても如何に君が勤勉であり一つの目的を立てると必ずそれを成し遂げねば止まない確固不拔の精神を以つてゐたかと云ふことを知る事が出来る。その勤勉終に報いられて最近は一等通譯になられてゐたとの事である。

又一方書は君の生來好むところ、米山朴堂氏に師事して天晴見事な筆蹟を示して居られた。

撃劍は青年時代より常にやつてゐたが隊に入るや銃劍術は又得意とするところであつた大隊中切つての強者で試合などで優勝したことは屢々であつた相撲も亦選手であつたことは隊内有名のことで現に中隊に保管されてある優勝旗も同君の獲得されたものであると云ふ。

安東の中隊にて君のお世話になつた青島源作君が當時のことを追憶しつゝ眼をつぶり乍らしみじみと物語るところによると

當時君は彈藥係を命ぜられて居つたとか、でどうにかして部下の者の射撃を上手にしたいものだと口ぐせの様について、或時は標的のつゞれたのを自費を投じて直し、或は又射撃の點數をつける表を夜十二時頃までも、たつた一人で下士官に起きてゐる熱心にかき上げなどして射撃に對する趣味の向上に一段と努力した。最近においてはラヂオ・ニュースをその都度黒板に書いては兵隊などに時局の問題の理解に努める等、兎に角兵のためを思ひ兵のため盡すことが非常に懇切であつた。平常は無口の方であつたに口をあらゝげて叱りつけるといふ様なことはなく叱るべきときは友情あふるゝ言葉を以

つて眞に兄であり親であるかの様な純情を以つて論ずといふ風であつた。

更にかの零下何十度といふ様な極寒の地にあつて殆んどすべての人が酒をのむのに君は殆んど一滴もといつていゝ位にのまなかつた。

宴會などがあつてもたしなまない君は、むしろつまらないつきあひをしなくてはならない様にはたからは思はれる時にも、決してそんな顔もせず、飲んで酔ひさゝめくその席をとりもつといふ様なそんな細かい事にも心やりをもつてゐた。或るときなどは上官から「おい杉山、飲めーバイ飲め」としきりにすゝめられて遂にはその席を逃げ出した。するとその上官は「どうも杉山が居らないとなんだか淋しくていけないからもう一度呼んで来い」とこんな事もあつたと、

又君は随分他人のまねの出来ない様な努力精勵してゐるのに、會つてそれを人に話さうとはしなかつた。

「標的が昨日つぶれたのに誰が造らへたや」

と云つても黙つてゐる位、すべて、こんな調子で自らを高く見せようとはせず黙々として努力をつゞけて來たのであつた。従つて君の中隊或は君の係の仕事などは何時點檢されても、常に整理されてゐて實に大隊切つての模範下士であつたといふ事は單なるお世辭ではないのである。

部下に對し隊に對し友人に對して以上述べた様な態度であつたために上官よりは一倍信頼され部下同僚よりは敬慕の的となつて居つことは餘りに當然すぎる事である。

戦死の翌日の安東新報に掲載された藏重隊長の言葉にも

「……杉山曹長は性温厚、品行方正で大變事務的な才能に富み中隊では兵器係をやり併せて在郷軍人會、中學校の兵器保管にも任じて正確でありました……」

といひ、殊に令兄、鶴吉氏にあてた一月二十日付の書翰の中にも

「……刻々戦況は悲惨の度を加へ申候座して止まらば全滅は火を見るよりも明らかにして退却はもとより執るべき道に候はず熟考の末一部を以つて最も頑強にして最も險峻なる高地による敵に向はしめ主力を以て他の敵に對し猛烈なる攻撃前進を敢行する如く決心致し申候

陛下の赤子を死地に投ずるは情に於て忍びずさりとて投せざれば主力を如何にせん今は躊躇すべきに非ずと決心仕り溢れんとする涙をおし隠し、平素最も信頼する御令弟に此の重任を命じ申候云々」とあり。

如何に信頼されしかは危急に際し、君ならではと重任を命じたる點にて知る事が出来よう。

又前に掲げてある同隊長の言々血涙のにじむた書翰の全體にあふるる痛恨哀情の感に堪へざるの情を想ふ時、君が如何に隊長を畏敬せしかを知ると共に君が隊長より如何ばかり信頼されて居つたかを物語るものではあるまいか。

君は又後進を思ふの情懇切なるものがあつた。君の出生地附近の人々で安東に入隊したものは素より安倍郡吾本縣人に對しては特に郷土を同じうするといふものを持つ共通の親愛の情を、更にぬけ出でた兄弟とも師とも謂はゞ言ふべき純情を以つて誘掖された。君が訃音を聞き傳へて弔電を捧げるもの手紙をよこすもの、或は態々訪問する、など令兄に對して、生前君から受けた細々の情を披瀝して、肅然として在りし時の俤を偲び、受けた様々の親切を涙と共に告白するものが少くなかつた。ことに當地より入隊せしものは事は身邊の些事より軍務其他人間としての務に至るまで到らざるなき指導啓發を受け、今春本溪湖に入隊せし深澤、伊藤望月の三君などに對しては四月歸郷せし時に一々照會の名刺を與へ入隊前より屢々手紙をよこすなどしては激勵し入隊するや安東より態々本溪湖まで餘暇を以て出向いたと聞いてゐる。

伊藤君から某友にあてた最近の手紙の一節に
「……去年の十二月廿六日杉山軍曹に逢ひました。運命の緒に動く小生等二人會つたがうれしくて一時は言ふ事が出来ませんでした「ヤア伊藤何回戦つた」「軍曹殿俺は八回ばかり戦ひました」なんて言ふと「ヤアやつたナア俺はまだ來たばかりだが俺の守備區が馬賊に襲はれてナア今日駐屯地へ歸るが命あれば又あはふお互にお國のためだ、命をすてご奉公しよう」と曹長はいはれた「左様なら」といつた時には涙に當るんでお互に姿が見えなかつた」

と
又戦友石川氏より令兄にあてた書翰にも言葉と涙のにじむ純情が溢れてゐる
「……僕は初年兵の頃安東に入隊し兄の戦友として色々と面倒を見て頂き
まして、豊橋教導学校入隊の時一ヶ月に二回の激闘文を頂きました。其
の後に僕も僕のために、どの位つくして下さったかわかりません。其
の内に隊をかへて仕舞つて僕は残念でした。兄もきつと弟の顔も見ないで
名譽の戦死されて残念で御座いませう。僕も同様に居りますれば兄の死に
水をとり又骨を拾ふ事も出来たで御座いませうに、何の御世話もする事が
出来ず悲しむばかりです」
と哀しみ更に、陣中哀離の詠歌の一二を擧ぐれば

兄逝きて幾日かなれどなほもまだ

線香の香り部屋にこもれる
永遠にかへらぬ兄をかりそめの

僕の心からの歌です。兄の寫眞に毎朝手向けて居ります。

海山遠く故山を隔つた地、知る人とはなれ殺伐な満洲の原野にて君に見
えることの出来た彼等は如何ばかり君の友情に感激し心強く思つた事ら
う。然るに今や君が訃報を手にして如何ばかり痛惜の寂寞の情に堪えざる
とぞ。

日々残虐厭くなき支那人を相手にして我が帝國の生命線、動脈たる滿鐵の
守備に當る身は、一步出づれば生命は忽ち危険に曝され、寝ぬると雖もしば
しの間も平和な圓かな夢路を辿る事はのぞまれない。そうした中であつて君
は生家を想ひ兄弟をきづかふの純情の人であつた。令兄に對しては勿論家に
ある老人子供に對しても將又近所の友人知人は近所の子供達にさへも暇
あれば便りをかき送るのを忘れなかつた。

令兄鶴吉氏夫人はしみ／＼と語つた。今年の正月には六人ある子供へ一人
一人へ年始状をかき送り

「お前達はよくいふ事をききなさい」

「よく勉強をきなさい。俺は兵士でえらくなるからお前たちと兄さんと競
争で、えらくならう」
ともかいてあつた。

そして

「家でもどうか勉強させて下さい」
と兄への願ひが述べてあつたまだやつと三つにしかならない子供へは「お名
前を知らない人」へとかいた、ユーモラスなものもあつた。

めい／＼にプレゼントとして新年雑誌を送つてよこし一々目を通して注意
すべきところ、心得べき教育的なところへは一々肩點をさへうつてあつた。

質素で儉約な君は平常貯蓄を忘れなかつた。その貯金の中から屢々爲替を
送つてよこしては

「これはお婆さんへ、何かお菓子でも買つて下さい」といひ

「これは兄さんへ、兄さんも子供が多くて大へんでせうからすくないけれ
ども學用品でも買つて下さい」といひ

「これは子供らへ、學用品でも買つて上げるといひ、が」
と言つて各々に斯うした心付けさへもよこした。

嫂さんは涙ぐみながら
「本當によい弟でした」としみ／＼と物語られた。

渡満してから最初の歸郷は昭和六年四月の九日、將に滿六年目である。昭
和五年七月勳八等に叙せられた君の胸間には此時それがきらめいてゐた。

思ひきやこれが君の故山の永遠の別れにならうとは、
無常なる哉蒼天、果敢なき哉人生、花は落つもまた開く日もあらん。月は
缺くとも又盈つる時あらん。されど君一度去りてまたいつの世にか還り來る
べき。

歸省中の十日間餘は君にとつては精神的に實に豊かなしかし忙しい日がつ
ゝいた。或は親戚に或は女人に知己にあらゆる人を訪問しては心ゆくばかり
物語つた。

又或時は
「お母さん今日はお墓参りにいきませう、お前達もおいで」

といつて老母子供を伴ひ父母の墓前に頼つた。それから「久々だから今か
ら淺間山へ登らう」と自ら老母の手をひき子等のたはむれるのをあしらひ乍
ら山上から下瞰しそして老母に向ひ

「七歳のときからお母さんに育て、貰つて私も大きくなりました。本當に
深いお世話になりましたが、どうかもう二年まつて下さい。母さんの色々
の苦勞は知つてゐますが、是非がまんして下さい」
としみ／＼物語つたととき、

山を下りてからは子供らめい／＼色々な物を買つて喜びせやら夕方家に
かへつた。

又四月の十四五日頃からは
「お母さんもあまり方々へいつた事もないでせうから、横須賀の姉さんの
ところへ見物乍ら行きませう」

と、母を伴つて、所々方々見物させた事もあつた。
親思ふ心にまさる親心今日の訪れなんとときくらん
と傳人松蔭は言つてゐるが君は誠にこの心を理解出来た人であるに相違な
い。久々の歸郷に多くの輩は家を外にしてすこす日の多きを見る中に、君の
家庭に對する心はゆかしき事の限りである。

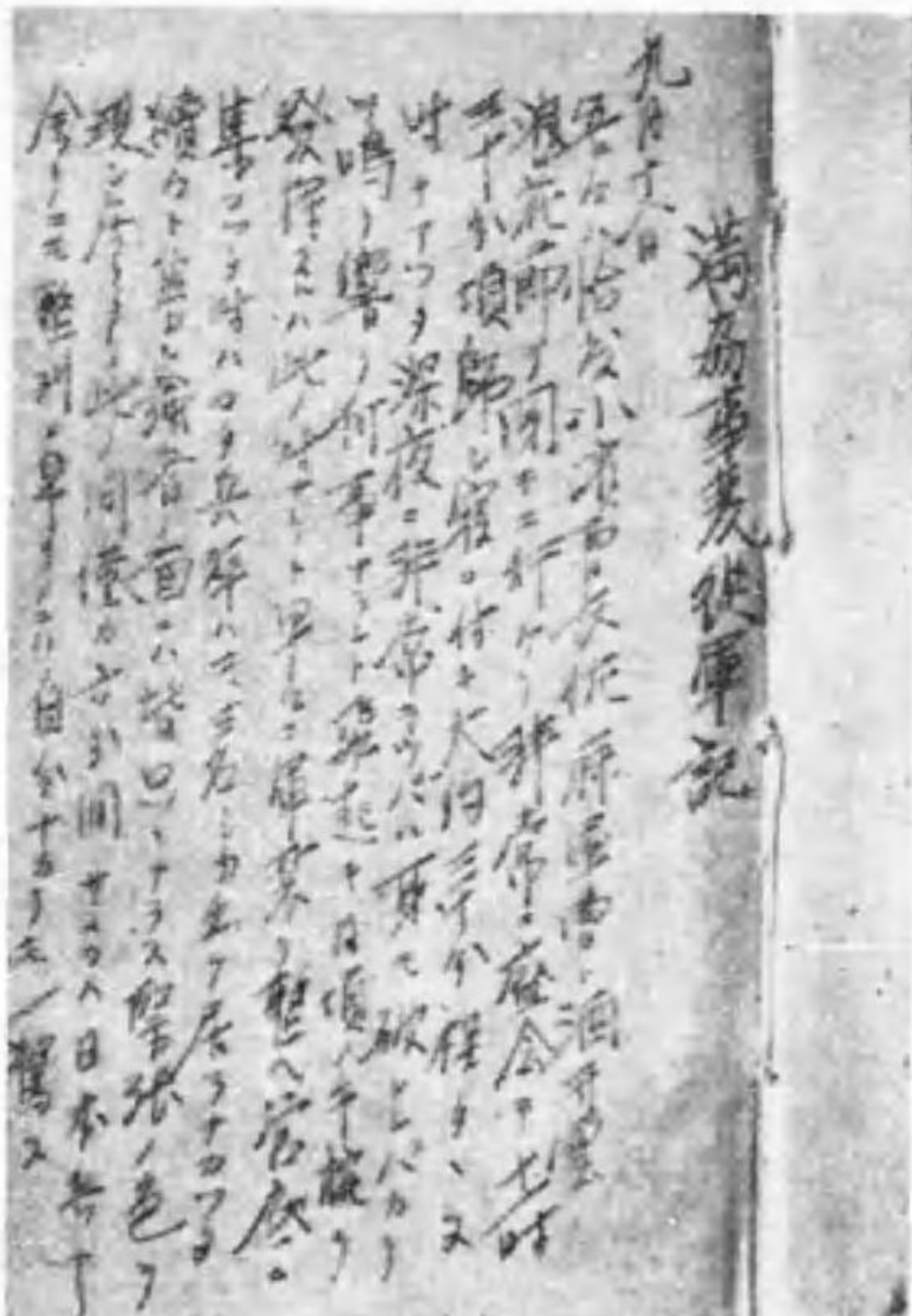
三人の姉達の家をそれ／＼訪れて相當に多くの金を「土産のしるしに」とて
呈し友人の子供にさへも玩具を土産として與へたといふ實に情緒豊かな人だ
であつた。

此地安東軍人分會員が君の歸郷を聞き知つて一夕談の宴を張つたのも郷
黨友人よりの信望の厚きを意味するものでなくて何であらう。

四月二十二日は君が愈々再び渡満された日である。この日柳新田及知人の
人々は宛ら新らたなる入營兵を見送るかの様な多勢の見送りであつた。驛頭
に花々しく見送られた君は、故郷を君を生んだ故郷を君が生長した故郷を永
遠に去つたのである。これが最後の旅立であり別離であるとは誰が知らう。
今にして思へばすべてこれ思出のものならぬはなく、悲愁更に新らたなる
ものがある。
人生の半ばに達せずして逝きにし君、幾多かくはしき前途への希望を抱き

滿洲事變從軍記

此從軍記は陸軍省より頒布の滿洲事變從軍手帖に萬年筆を以て丹念に記せるもの。原文は片假名交り文なり。最後の昭和七年一月十三日は戦死の五日前なり。



日記

九月十八日

吾々は恰度小瀧曹長、佐藤軍曹と酒井雲の浪花節を聞きに行けり非常に盛會で十一時三十分頃歸り寝に就き大約三十分程たぬ時であつた。深夜に非常ラツバは耳も破れんばかりに鳴り響く。何事ならんと飛起き目頃の手腕を發揮するは此の時なりと早々に軍裝を整へ營庭に集まつた時はまだ兵卒は二三名しか出て居らなかつた。續々と集る強者の面には皆只ならぬ緊張の色を現し居りたり此の間僅か六分間、さすがは日本兵なり餘りにも整列に早い時には自分ながらも一驚す。

時に恰度零時一〇分なり。週番士官宮本中尉は徐々口を開き奉天附近の滿鐵線を支那兵の爆破の報を知らす。

其内續々と來る情報は第一報 目下奉天守備隊は柳條湖分遣隊と協力し北大營支那兵營に向ひ支那兵を追撃中

第二報 第四中隊は何時にても出動し得る如く準備し待機しあるべし一同緊張し出動準備を着々進め刻々と來る情報に一同大喜び。愈々時節到來遊賊學良を撃滅せんと意氣大いに擧る。

一、電話當番事務室に飛び來り大隊長よりの命令を報告す。命令要旨

一、第四大隊第四中隊は速に最近列車を以て鳳凰城に到り鳳凰城支那軍隊の

武裝解除を行ふべし。

余は最近列車にて連山關部隊を指揮し鳳凰城に到る、電話當番に依り一般に達せられ早速一同出動準備にとりかゝる時に午前四時三〇分、午前六時〇分強者を乗せた臨時列車は鳳凰城着、大隊主力と合し未だ且て味はざる緊張味を帯びて豫定の攻撃隊勢に移る。

何分にも初陣の事、腰に持つ百二十發の實包撃ちつくせるかと思ふと自然と足取も軽く一步ノ敵陣に近づく。

余は小隊の前方警戒のため卒五名を率る警戒兵となり所命の位置に前進す。大隊長は主力を率ひ鳳凰城團本部の北方より、中隊は南方よりそれノ攻撃準備完了。

鳳凰城支那民は餘りの急に何事の勃發せりと各々吾々を見て異様の口吻もらし通るものあり、其間大隊よりは軍使として福岡少尉以下七名決死隊を作り姜團長と交渉に出す。

八時二〇分頃姜團長は吾が軍使に導かれ馬車にて陣中に大隊長を訪問し交渉を開始す。

交渉の結果部下軍隊の武裝解除を承諾し其れぞれ各中隊毎に手分けし彼等の武裝解除に着手す。

第一中隊は第七連、第三中隊は第六連、第二中隊は團本部を第四中隊は第八連を其れノ各連長の案内で兵營に到り之を解除す。

あはれ昨日の大官は今日の一支那人となり命を吾が軍に託するとは支那人に非らざれば見ざる事なり。

出るは出る小銃拳銃迫撃砲山の如し、支那の兵隊様は盛に恨めしさうな眼にて吾れノ云ふ儘となり面白くもあり又可愛さうな感せり。

午前十一時完了、支那兵は鳳凰城分遣隊に集め監視し置き三時二〇分發列車にて安東に凱歌を上ぐ。

然しさすがは支那兵各人銃一挺彈藥三百發位あり其他戰爭諸物品のあつたのには尠ならず驚く。

安東五時頃着き驛前に集合し安東支那町の交渉所及公安隊巡警局の武裝解除

に出發す。

これよりさき安東に在りし宮本中尉は殘留員を率ひ前記箇所の武裝解除をなしあり之に在郷軍人青年訓練兵應援し安東守備隊の營庭には沒收兵器で山をなす。

一同支那町の警備に或は巡察に夜もろくノ寝れず極めて緊張の中に本日も終る。

九月十九日、二十日

今日は保記占領地の整理及細別に亘る武裝解除等を行ひ地方支那人より秘藏の拳銃等の沒收。

商埠公安局縣政府水上公安局縣公安局には其れぞれ分遣隊を配置し水も漏さぬ警戒を行ふ。

十月十一日

突如奉天に出動命令下り中隊よりは廣瀨小隊編成され出動に決す第一列車にて出發驛ホームには見送り人で山をなす。

愈々奉天に乗り出してチャンコロ相手に一戦交へられるかと思ふといやが上にも呼吸は上り益々元氣となる。

吾々は八時四十六分一同の見送り萬歳の聲に送られ途中鷄冠山に於て會我部中隊長の指揮下に入り一路四平街に到り守備隊司令官の豫備となり四平街守備隊前假兵舎に入る。設備の不安と給與の悪いには閉口す。

十月十三日

別に新報を得ず依然待機し居り。

十月十四日(第一線昂昂溪附近に軍需品輸送)

第一線大興附近に軍需品の輸送を命ぜられ藏重中隊長の指揮下に入り四平街午後四時頃出發し一步ノ内蒙に進む。

人員僅か中隊長以下十五名殊に未だ警備もなき四洮線、洮昂線を前進するため異様の緊張味を帯び中隊長より右の訓示を受く。

今回の吾々の進むべき所は馬賊或は匪賊共所々に出没し殊に全然警戒なき支那鐵道の事なれば何時如何なる事あるかも知れず萬一かゝる場合は全自協力此の任務を果すべく緊張して任に就け、第一線に起ち居る兵卒は目下非常な

る苦戦に陥り、此の軍需品を一刻も早く送るのが吾々の任なれば其任重且大なり。

途中列車中も不安々々で食事にさへ缺乏を來たし翌朝漸く洩南にて第六大隊より朝食の残飯を貰ひ辛うじて生命をつなぐ。

特に舊友高島氏と面會出來異様の感にうたる其れより再び出發す。

途中支那馬賊の前進しあるを見、一同非常に緊張射撃準備を整へたるも後張海風の軍隊なる事が旗によりて判明し安心す。

夜に入り不安は増す、列車の窓より見れば各部落は馬賊共の焼打に會ひたるか火焔猛々と立ち殺氣立つ晝夕食は途中に部隊が居ない爲め出來ず。

殊に十二時頃よりスチームの故障を起し列車中寒くて閉口す、三時半頃鎮東に着し此の驛には給水タンクがあるため水の補給を受け薪炭を得て其れより列車中にて汽罐車の中にて飯盒で食事を作り五時頃晝夕食及朝食を一度に食す。

腹がへつては戦争どころか話をするのもいやになり命が一秒一秒と、まる様な感あり、然し最早大丈夫途中東原街巷等を経て九時頃泰來に着す。

此附近より輸送列車の洪水で前進不能止むなく泰來に一夜を明かす此處は支那町も大きい又幸ひに滿鐵慰安軍が第一線に行くべく來りたるため副食物其他を求む。

此の地に吾が飛行中隊ありて數十臺の飛行機は銀翼を列ねて待機しあるを見る。

當地に於て輸送支那人を検査したるに昨夜逃亡せるもの二十七名あるを發見す、今日も亦夕食は依然準備其他で十二時頃食す。

此の附近より段々不安にも馴れて夜も眠れる様になれり體等も段々疲勞し居るため知らず知らずの中に眠る様な事度々あり。

當地午前七時頃出發途中五廟子を経て紅橋に向ふ此の地は有名なる嶺江の橋梁にて吾が軍が苦戦に陥りたる處なり中隊長より色々の説明を聞きつゝ大興に向ふ何分にも附近は一帶の沼地にして徒歩兵の通過困難の地なり橋梁は第一より第三まであり。

皆支那兵の爲め焼き落され目下臨時にかけたる橋なるため異様の音をたて汽

車は除行し今にも河中に落ちさせぬかと心配せり。

會て十六聯隊が此の附近にて苦戦したるのも當然の事なりと思ふほど地形惡し。

四時頃大興に着す。

支那兵の陣地は縦横に作られ居り當時の攻撃が如何に困難なりしかを憶ふ。

大興驛前には吾が名譽の戦死者の墓標が何本となく起り。

第二師團の兵卒は馬軍攻撃の準備に血眼となり働いて居り實際の戦場氣分を味ふ。

吾々は軍需品其他を當地にある第二師團主計に引渡す、たちまちの内に奥へ奥へと運ばれる、八時迄頃當地の陣地其他を見學す。

支那兵死體は二十有餘個其儘となり居れり陣地等も日本のものと大差なく支那人が築いたとは思はれざる程立派なものと感心せり。

八時三十分發にて江橋驛に向ふ此の附近の驛には列車が山をなし途中前進不能でスチームなし。

列車の中にて十一時頃迄放置され止むなく徒歩にて江橋驛に向ふ。何分にも今日は三十五度、加ふるに風強く未だ會て此んな寒い目に合つたることなし。

手等は銃を持つて居るのが一向他人の手の如く顔などをさすつても鼻の存在さへ不明の位、然し第一線に立つ兵隊のことを思へば何の此れしき位と各々勵し合ひ三十分位で江橋に着く。

然し江橋に着いたものゝ話さへ満足に出來ず而も休む所がない、止むなく驛の土間に一夜を明す。

餘り寒い目に合ひたるためベイチカもなき所なるも案外寒いと思はず朝迄起きて居りしんみりと眠られず。

午前四時頃全くの寒さに石炭を調發し一部は驛支那人と共に休む。

第一線に居る兵隊は吾々の想像以上の寒い目に合つて居る事だらう、こんな事を考へる時は安東附近に居つて寒いとか或は暑いとか云ふのは實に勿體ない事だ。

時二十分頃の江橋發列車にて歸路につく歸りはこれと云ふ任もなく勝手も判つて居つた關係で其割に苦勞せず歸れた然し洩南線で支那人の運轉手だけで車掌なしの列車に約二時間程走られて何時脱線するやと非常に危険の目に合ひたり。

吾が中隊は鄭家屯、洩南間の守備に吾々の留守中に移動し居り廣瀬小隊は大

手川附近の守備に任じ居りたり爲めに杉山以下五名は大手川にて下車小隊に合す。

時に二十一日午前十時頃なり。

第二十九旅團は昂溪附近の戦争参加の爲め奉天より出動途中四洩線茂林驛附近に於て列車脱線に二回迄も合ひ遂に戦争に参加し得ず非常に殘念がれり。

吾が會我部中隊は當地守備を第二十九旅團に引繼ぎ四平街支那交通中學校に移動す。

十月二十三日

當地交通中學校は設備等も割合に良く給與方面も良好なり。

茂林三林附近に時々支那馬賊共出て二回程出動す而し逃げるのが速くて彼等に徹底的打撃を與へ得なかつたのは殘念なり。

當地の馬賊の多くは乘馬が多く隨て出沒自在の爲め此れには少々閉口す。

此の地は案外呑氣で官給品の酒及其他の過給品で大いに野戰氣分を味ふ。

時々娛樂會を行ひ大いに英氣を養ふ。

故山の町長より激勵の手紙來る。

青年團、處女會、在郷軍人會からも盛んに激勵の手紙を貰ひ感激す、此の地に來り新聞を見入浴等にも入ることが出來て人間らしい生活が出來た。

十一月十四日

自分は中隊に後務整理の爲本日午前十時四平街發列車にて歸隊す。

午後九時〇分頃の安東の地を踏んだ時は何んとなく晴々とした氣持せり驛頭に江守、吉田の兩氏居り約三十日間離れて居つたため疎遠を暖む。

中隊に十時頃着く同郷の藤永其他の者と動功話に花を咲かせ十二時頃休む。

十一月二十七日

大隊委員より集合を命ぜられ本日第七列車にて出發本隊委員と打合せ中隊

より早刻歸隊命令を受く其れは中隊が奉天方面に出動命令を受けたからだ。

早速第六列車にて歸隊す。

中隊は早や大騒ぎ自分も其の準備に取りかかり第一列車に出發することゝなる。

十一月二十八日

午前六時二十分頃奉天着守備隊の豫備となり奉天守備隊に待機す、本日午前二時頃錦州附近に日支兵の衝突あり奉天に待機中の駐部隊及第二大隊は出動す。

十一月二十九日

第二大隊本部副官は裝甲列車にて戦團中敵弾に當り戦死せるの報來る。

午後六時頃右副官の死體來着す。

十一月三十日

當社員俱樂部に於て平凡の日を送る。

三十日午後五時頃急遽四平街方面に出動を命ぜらる。

依て第四大隊より鈴木少佐の指揮する機關銃隊と合し翌一日午前九時發列車にて出發す。

十一月二日

鄭家屯着當地には會我部中隊早や來り守備し居り自分達は支那南大營兵舎に入る夕食は水が悪い爲め黒い飯を貰ふ。

當地にて藏軍會我部二個中隊と吉林より來りし板倉小隊を以て鈴木大隊を編成し四洩線八面城——衙門臺迄の警備に任ず。

當地は氣候は悪し殊に水の不良糧食の不可等で勤ならず不便を感ず。

兵舎は支那兵舎の改造せしもので約一個大隊程入るゝやう準備しあり前に朝鮮族團の入りたる後あり。

此の地に來てよりは幹部が少くない關係で連續週番を行ひ毎夜の様に来る情報に初めは非常に不安を感ぜしも段々馬賊共の事などに馴れて平凡の日を送る

十二月十一日、十二日

新報を待つ中隊は本日機關銃小隊を合し壹瀨山に向て行軍演習を行ふ途中演習を行ひ該山に突撃し大いに志氣を鼓舞す。本日中隊より慰問品を送り中隊全員大騒ぎを演ず一同大喜び自分は左記の人々よりの分を貰ふ。

群馬縣佐渡郡茂呂村 尙武會 三個
同 沼田町柳 叫 榎山莞爾様 一個
安東朝日小學校

四女井上英子、高二女田中満子氏より慰問状を貰ふ、幼き子供共の健氣なる慰問状は吾々の志氣を大いに發揚させてくれた。

内地から来る手紙或は慰問品を貰ふのは實に嬉しい毎日の來そのを待つて居る者のみ婦人あたりから手紙でも來ようものならそれこそ中隊中を持ち歩く様に兵隊は喜んで居る。

故山青年會及落合長三郎、杉山傳太郎及町長伊藤氏より激勵の手紙來る。柳新田町青年會より慰問品來る及故山の小學校より小學生の慰問文等を校長杉原次郎氏より送くらる。

十二月十三日

起床當時竹内軍醫より各人の銃口検査を行はる。三十五輦の巨砲は軍醫の前に出し受檢する珍藝を拜見す。

これは最近當地に急造の料理店が多數出來た爲め萬一を考慮し行はれたるならん本日白市に行軍を行ふ自分は今日は乗馬で行なつた爲め割合に疲れなかつた三時半頃歸隊す。

十二月十四日

本日左記の情報來る。

敵騎兵二千名鄭家屯襲撃の報あり。

午後五時頃宮原伍長は部下五名を以て裝甲列車の先驅隊となり白市方向に敵情搜索に派遣さる。

中隊はにわかには殺氣立ち出動準備を整へ待機の状態にあり。

尙十二時頃四平街第五大隊より一個中隊來援の報あり急に兵舎の準備をなす

任内務大臣	中橋徳五郎	任農林大臣	山本悌二郎
任大藏大臣	高橋是清	任商工大臣	前田米藏
任陸軍大臣	荒木貞夫	任逓信大臣	三土忠藏
任海軍大臣	大角岑生	任鐵道大臣	床次竹次郎
任拓務大臣	秦 豊助	任内閣書記官長	森 格

十二月二十日

中隊午前九時出發遼河鐵橋附近に到り水上演習及重機機關銃寒時射撃設備等の研究を行ひ十一時三十分頃歸隊す。

柳新田町青年團より手紙あり。

當地駐屯中の七十八聯隊は某方面に出動の爲め本二十日午前八時出發す。

十二月二十一日

情報に安奉線一帯に匪賊團出現せるの報あり。

錦州方面の情況逐次近迫の模様なり。

川口平八氏より來翰あり。

十二月二十二日

吉田智縫子氏より來翰あり喜長氏は退院後仕事に多忙の由。

十二月二十三日

新報を得ず。

特務曹長、曹長出張不在の爲め多忙を極む。

中隊長宅に女子産まるとの報あり。

安東小學校左記の者より慰問文來る。

十二月二十四日

本日中隊は砂山附近に示威行軍を行ふ。

午前九時出發三時頃歸隊す。

高澤中尉大學試験の爲め不在中本日來鄭す。

別に新報なく平凡に終る。

中隊は當地警備を第五、第六大隊に引継ぎ明二十五日安奉線に歸隊することとなる。

其の者の入る部屋の掃除に多忙を來す。

十二月十五日

午前五時頃増援隊來隊す。

今日は一日待機状態にて終る其後別に新報を得ず。

十二月十六日

第五大隊増援隊は午前九時發列車にて歸還す飛行機四臺位參加し敵情を搜索したるも得る處なし朝鮮七十八聯隊二、九中隊及野砲二個中隊當地に増援さる慰問品受領。

東京市淺草區猿屋町一七

東京市淺草區千束町二ノ二〇一

同 田町一ノ四六竹内産婦人科醫院方 永島喜美子氏

十二月十八日

新報を得ず。

靜岡師範學校寄宿舎生徒一同より慰問状及慰問品來る同校杉山春彦氏(北安東田中)より慰問状來る。

煙臺守備石川軍曹より來翰あり。

安東大和橋通り八丁目二の田中満子氏より來翰あり。先般朝日小學校よりの手紙は例の武藏屋様の御令妹と判明し意外なり。

十二月十九日

新報を得ず。

鶏冠山より通報。

午後九時頃秋木莊驛を匪賊の爲め襲撃を受け驛員二名及支那人二名死傷し驛を破損さるとの情報あり。

本日は中隊は娯樂會を行ひ歌ふ踊るの藝人萬能の一夜を明かす。

陣中にて浪花節も聞けば芝居も見れば野戰氣分も味ひ英氣を大いに養ふ。

新聞に依れば現内閣は財政難か或は何にかで辭表を提出す。

新任閣僚成立

任總理大臣 大 養 毅 任司法大臣 鈴木喜三郎
任外務大臣 大 養 毅 任文部大臣 鳩山 一郎

十二月二十五日

鈴木混成大隊は安奉線の急を聞き本日正午發列車にて安奉線に向ふ。

十二月二十六日

牛心臺戰争參加

鈴木大隊は牛心臺の匪賊討伐の爲め本溪湖午前六時發牛心臺に向ふ途中牛心臺迄牛心鐵道を利用す、高力營子附近に於て匪賊淨の洗禮を受け交戰約二時間敵を撃退す。

十二月二十七日(牛心臺匪賊討伐)

前夜は高力營子に大隊は宿營し第四大隊より歸隊命令を受け本日午前七時發にて歸路につく。

午後二時本溪湖着同二時五十分發安東に向ふ、安東に十一時頃着本夜は鳳凰城附近の情況急なるため驛列車にて待機中翌午前三時頃五龍背に匪賊襲撃の報を受け急遽出動す分遣隊は勇敢に交戦し死體四を負傷若干を得て撃退す中隊は五龍背着と共に追撃し約一時間前進したるも敵見當らず歸隊す五龍背より列車にて鳳凰城の匪賊討伐に參加の爲め出發す。

十二月二十八日(石頭城匪賊討伐)

午前十時頃鳳凰城着石頭城方面の匪賊討伐に出發す途中匪賊を見ず達堡附近に宿營す當夜特別任務を受け石頭城鐵佛寺附近に高澤中尉以下三十名午後十時出發馬車にて終夜前進し翌朝二時頃石頭城着同五時鐵佛寺に到着したるも徐文海は已に逃亡して居らず。

歸路につく滿洲の冬の夜行軍は實に寒かつた。達堡に午後二時頃着大隊は鳳凰城に向て出發し居らず達堡小隊は残り居り吾々と一所に馬車にて歸路に着き午後四時頃鳳凰城着大隊は吾々より少し遅れて歸る夜は鳳凰城官舎に宿營す。吾々は小學校長辻先生の家に宿營す。

事件發生以來不眠不休に活動し偶々地方人の家で蒲團の中に入り休み體が變な感じがして初めの内は眠れなかつたが疲れて居つたので忽ち白川夜舟翌朝迄知らずに休む。

十二月三十日

本朝午前六時集合なりしが餘りの疲れで遂に起きるのが遅くなり五時四十

分頃驚き飛び起き朝食もそこそこ仕度し集合時間に漸く間に合ふ。
本日は某方面に出動する豫定なりしが急に變更し中隊は安東に歸る。
安東に午前八時頃着取急ぎ中隊に歸り待機す。七十有餘日で初めて中隊に歸り恰も他人の家に行つた感じせり。
十二月三十一日

午前三時出發自動車にて大東溝方面に匪賊討伐に出發す龍王廟に午後二時頃着す而し匪賊は逃亡して居らず夜は當地に宿營す。
一月一日 (昭和七年) (大東溝馬賊討伐)
奉天城外爆音一聲以來皇國の生命線の確保に戎衣を改むる暇なく萬物凍る龍王廟の一支那民家に昭和七年の新春を迎へ遙かに皇居に向ひ中隊長以下禮拜す。

地球は廻轉し二十八歳の第一日を己に大地に力強く踏み付ける、昭和七年も希くば吾れに幸あれと祈る。
中隊は午前九時頃龍王廟西方村落より威嚇射撃のため迫撃砲を數發射撃す。其れより一同自動車にて歸路につく、午後五時安東着。
一月二日 (電線被害)

本日は連山關に事務打合せのため第五列車にて行く、長い間中隊の事務も取らざるため色々連絡事務もありたり、第八列車にて歸路に付く午後九時安東着中隊は本夜ロー高間に電線被害ありたるため出動し居らず、自分も中川小隊に加はり沙河鎮附近の待機部隊に加はる、自分は兵五名を率ひ保線區員を高麗門迄護送し歸り沙河驛に朝まで待機す。
一月三日、四日

本兩日は別に情況もなく事務整理に多忙を極む、四日は勅諭五十週年記念のため中隊舎前にて式あり、午後は吉田様の家に行き雑煮を戴き初めで御正月を迎へた様な感じせり。
四日夜急に情報ありて蛤蟆塘附近に出動す道路は六道溝より入りたるため非常に悪く困難す。

一月五日 (蛤蟆塘馬賊討伐)
本朝三時出發蛤蟆塘に向ふ。

道路悪しく目的部落には匪賊居らず附近部落を搜索したるに約四十名よりなる匪賊らしきものあり中隊は之を包圍し全員を逮捕す。
午後十二時〇分頃蛤蟆塘に引上げ中隊に歸る。本日午後は中隊にて休養す。午後七時頃情況あり鳳凰城に出動す。
一月六日

朝八時頃迄警戒したるも何等得る處なく午前九時頃發列車にて安東に歸る
一月七日
本日は中隊の兵器庫其の他の整理を行ふ。
別に情報もなく終る午後九時頃電話にて第二中隊は山海石山方面にて匪賊討伐中島井曹長戦死の報來る其他兵二名負傷せりと。
大隊も愈々初めての犠牲者を出す。
一月八日

本日は午前中は別に情況もなく終る、午後十二時頃某方面に出動の豫定なりしも午後八時頃に至り中止さる、夜は慰問品の返事を書き十二時頃休む。
一月九日 (馬家崗附近の戦斗)
本日午前十一時四十分發列車にて鳳凰城に出動し午後五時頃鳳凰城發鈴木少佐指揮の下に中隊より二個小隊第三中隊より一個小隊を以て編成し大孤山街道を馬車編成にて前進す。

冬の滿洲の夜行軍は話にならんほど寒むかつた。途中情況を搜索しつゝ午前二時頃白旗着當地に於て理福田の部下の宿り居の家を捜し當て擲弾筒を投込み包圍したるも己に裏より逃亡し乘馬十六頭を押収す。
尙も前進し王家崗附近に差しかゝるや突然前方より射撃を受け時恰も拂曉時にして咫尺を辨せず取急ぎ其場に展開攻撃前進をなす。
餘りの突然而も敵より機先を制せられ一同は馬車上にありたるものもあり相當狼狽し支那馬車が逃亡するやら或は支那人が逃げるやら大騒ぎを演ず。中隊は前進に前進を重ね匪賊を追撃すること三時間遂に敵死體四十二名負傷不明の絶大なる損害を與へ凱歌を擧げ歸る。

然るに歸らんとしたる處携帶口糧間食を乗せある馬車隊と道を違へ一同午後二時頃迄に到るも食物を得ず實に閉口止むなく其儘歸路に付く腹のへつたる

昭和六年日記

〔紙數の都合上一月より九月迄毎月一部を掲載〕

年頭所感

昭和六年の新春を迎へ正に氣も心も心氣一轉す。
本年は國としても又内外共に多事多端の時、折角身を大切に於て國家の爲めに盡力せんとす。尙本年は昨年よりの心願を成就すべく、又眞の人の踏むべき道を守り、人として恥ぢざる一年を送ると共に、益々將來に對する基礎を堅くし理想に向ひ一歩一歩進まんことを祈る。
希くば神よ、我に幸を與へられんことを祈る。
憂き事のなほ此の上につもれかし

かぎりある身の力ためさん
あゝ努力努力、凡て吾れの努力奮闘により前途を展開し、目標に向ひ最大の努力を拂へ。

一月一日
御目出度ふの聲起る初詣で
今日は元旦曉を破つて非常喇叭で眼を醒ます、其れより舎前で四個小隊に編成終り鎮甲山に向つて出發、途中驅足神社に參拜、拜神の喇叭四方に鳴り響く其れより山上にて皇居に向ひ遙拜し歸營、陸軍官舎近藤、緒方、佐藤諸氏の家迄行き荒し廻る。愈々目出度し。
(吉田の家で西村氏等と十一時頃まで遊ぶ。斯くして昭和六年の新春も第一日を終る)

一月二日
朝起床と共に銃劍術の初めをなせり。本年も吾等武人は此氣合を以て進まん。それより書初をなす。
熟慮斷行を余の座右の銘として本年を過さん。正に活動の春伸びよ高く、向

こと此上なし。午後三時頃連絡の古田軍曹後方より駈馬し來り馬車の行方が判明す其れより進むこと約二千米附近に來るや馬車隊迎へに來り一同車上の人となり歸る。而し食物は昨夜の寒さで皆凍り飯を食べる事出來ず午後五時三十分頃鳳凰城に來り鳳凰城小林鳳凰旅館に宿營し漸く飯に有りつく一日分を夕刻一回に食べたる未だ曾てなし本戦團に於て中隊櫻井武平は大腿部に貫銃創を南澤直政は擦過傷を負ひ病院に入院す。敵も相當抵抗したる關係彈丸も隨分眼の前に落ち物すごい光景を見る、然し命は運なり案外彈丸も當らざることを此の戦闘でつくづく知る。
一月十一日
明くれば鳳凰旅館内に午前八時頃眼をさます起きて見れば雪は一ぱい庭に降り居りたり。
中隊は午前九時發列車にて安東に歸る。
安東市民は吾々の歸るのを驛頭に出迎へてくれ非常に働きがひのある様な感じせり。
午後は休養をなす。
一月十二日
別に大した事もなく平穩なりしも午前十一時頃九連城に馬賊進入の報來り警察官奮戦中との由、中隊より平野軍曹以下出動したるも馬賊は死體二負傷者其他捕虜二を殘し逃亡したる後なりしと其他得る所なし。
一月十三日
本日は連山關に兵器の用件にて行く第六列車にて歸る。
別に情報もなく終る。
午後七時半頃蛤蟆塘に匪賊出たとの報來り中隊は出動準備を整へたるも虚言に終る。

上の一路に終點なし。

廣瀬、宮本、吉田、大神の家を戰場掃除に行く。七時四十分歸る。

勅題 社頭の雪 曉來飛雪白 神廟鐸鈴鳴

新歲祈何事 遙聞拍手聲

一月三日

起床と共に銃剣術をなす。一汗流して八時頃終る。其れより習字をなす。午後は外出して吉田の家に行く。染物屋連中の寄合に仲間して馳走になる。酔廻るとはげ頭連中の歌を聞く。七時頃歸る。歸つて讀書して年頭の返信を認む。斯くして一日も終る。操典研究の豫定を變更したるは遺憾なり。

(覺悟は定まれり。昨夜の初夢良し高く更に高く)

一月四日

人生は七轉八倒様々の苦勞が伴ふ故尙更面白し。今日朝剣術をなす。十時頃から中隊長殿の勅諭奉讀式があつた。午後は別になす事なく床の上に寝てしまつた。五時半より臼井大人の家に行く。七時三十分頃歸る。夜は習字をなしキングを讀み終る。中隊では無禮講をなす。

一月五日

あゝ勿體なし、今日で年末から九日遊ぶ。其の間得る處ありしや？凡ては過去になれり。來るべき新しき日は意義あるやうに努力すべし。今日は剣術をやらずにしまつた。

午前中にこれと云ふ仕事もせず、午後は吉田の家に行く。七時半頃歸り橋詰君の靈に安東寺の和尚が經を讀む。本夜は通夜をなし其の靈を慰むあゝ可愛想なり。父母兄弟のなげき計り知るべし。

(橋詰君の極樂淨土に參らす様中隊を擧げて御祈りをする)

一月六日

あゝ悲しいかな故橋詰君の告別式なり。

中隊は午前五時起床、一同其の準備に忙しがつた。自分は日直で本日は別に仕事と云ふ事なく午前九時三十分より初め約二時間で終る。地方側より澤山な人が参加してくれた。式は非常に盛大なものなりき。定めし故橋詰氏も永遠成佛さることならん。午後は銃剣術で大いに氣合が入る。夜は習字して

終る。

(橋詰氏の爲大隊長中隊長中隊將校同下士准士官兵卒長野縣人會第一中隊兵卒より花環を贈る)

一月七日

起床と共に銃剣術の寒稽古をなす。皆んなの上達振には一驚す。約二時間日直も九時に交代す。彈藥使用計畫を書く。午後は防具の修理をなし終る。夕景七時半頃迄二時間剣術をなし終る。點呼後は雜誌を讀み十一時頃休む。九日に第一中隊と試合をなすとか、兵卒の元氣百倍の感あり。

(後來る賀状には閉口します。しかし好意を謝す)

一月八日

今日は陸軍始めなので剣術も少しで止め、午前八時十五分整列で山の内中隊を指揮す。約三十分で終る。其れより習字して午後は四時頃より外出、銃工長殿の依頼品を求め歸る。歸りが大變寒かつた。夜は習字して終る(中隊長殿足に故障が出来て引籠り中。七日、九日)

一月九日

起床と共に銃剣術をなす。本日は第一中隊より剣術の試合に來る爲め非常に稽古に實が入つた。十時頃第一中隊が來り十一時半頃から試合が開かれた。三本勝負では中隊が負け、紅白勝残りでは中隊が勝つた。自分も一中隊の伍長玉腰君とやつて漸く勝つ事が出来た。午後三時頃終る。

夜は奮闘の爲め疲れて休む。點呼後讀書をなす。十一時頃休む。

(今日は近來にない寒い日であつた。何分にも零下二十二度なり)

一月十日

起床と共にやゝいゝの聲、今日は初年兵係等が出て大分賑かだつた。其れより課題作業を讀書す。午後と同じ作業をなせしも四時頃から餘り疲れた爲休む。五時頃起き入浴に行く。

夕は又銃剣術をなし夜は作業をなし十一時頃休む。千田軍曹下士室に寝る。(寒さは前日に増し寒い寒い。中隊初年兵で凍傷に罹りし者四名程ありと)二月十七日、十八日

本日は午前十時三十分頃より中隊長の行ふ下士の現地教育あり。

連山作業山附近で匪賊に對する戰鬪ありたり、約一時間にて終り第六列車にて歸る。

途中四十二軒附近で運防あり。

下士四兵卒五名五龍背で下車す。直ちに小濱曹長以下下士一兵五名を以てハンドカーで現場に行く。五時二〇分頃現場に着き憲兵警察驛員等と協力して搜索したるも不明なり。其夜は高力に泊る。中隊より十一時半頃増援の爲め江守軍曹以下十一名着く。依然犯行の場所さへ不明、本日は中隊長大神中尉殿モータにて現場に行き細密に調査したるも不明の爲め更に安東より當日の機關手呼び出し遂ひに投石を發見す。村長藏風岐を呼び連れ現場を見せ謝罪せしめモーターにて歸隊す(大神中尉殿と同行)四十一軒附近の運防の爲め中隊は總出警戒をなす。

二月十九日

本日は日曜代日なので遂に起床ラッパが不明な爲め起きなかつた。高須氏も昨夜演習があつて十二時頃歸つた爲め起きず、六時三十分頃起床し午前中は習字及雜務をなし午後は習字を少しやる。夕刻旭山に昇る。夜はペン習字及算術をなし休む。

(本日は日曜なのに外出もせず自重して色々と出來た克己心は大いに嬉し

い)

二月二十日

本日は起床後藤水氏に拳銃を出してやる。朝食の際旭山に登り英氣を養ふ後兵器の修理を取り書類の整理をなす。

午後は午前と同じ。本日は割合に色々仕事が出来た。夜は算術をなし終る明日初年兵九連城に行軍に行く爲め晩の點呼を七時にす。十時頃休む。

二月二十一日

今日は初年兵が九連城に行軍の爲め四時半に起床す。自分も之が見送りの爲め五時前に起され空包を出してやる。午前中に包水堡の日本警察匪賊に襲はる。爲めに山中特務曹長以下一七名出援十一時頃自動車にて行く。夜は廣瀬特務曹長の家で餅を馳走になる。夜は習字算術をなし休む。

三月十日

本日は二十六回目の陸軍記念日なり。午前中は忠魂碑に參拜す。午後は一時半より模擬戰を安東市街にて行ふ。三時半頃終り夜は食堂に於て筑前琵琶を行ふ。十一時頃休む。

三月十一日

今日は第七列車にて連山關に劍術の爲め來る。午後より俱樂部に於て練習をなす。長い事劍術もやらぬので體が疲れて思ふやうに劍術が出来なかつた。三時頃終り夜は夕食後寝て朝の七時頃迄連続休む。

三月十二日

本日は午前中より俱樂部に於て劍術の試合ありたり。午後は兵卒の練習あり夜は活動寫眞を見にゆく。十時三十分頃休む。

(今日の試合にては二本負ける残念なり)

三月十三日

本日は午前八時頃出發し九時頃より初まる。午前中は練習及兵卒の試合を行ふ。午後は概ね午前と同じ。夜は習字及算術をなし八時三十分頃終る。本夜より劍術で大變疲勞する故少し早く休む事にする。

(休暇で歸ると思つたが如何すべきか？實施か是が行はざるか)

三月十四日

今日も劍術。午前八時三十分頃より初まり午後三時頃終る。今日は中隊に用事の爲め第八列車にて歸る。列車中氣分が悪くなる。漸くにして癒ゆ。九時三十分着す。列車中にて河浦遼陽病院より歸り車中にて會ふ。

三月十五日

午前八時頃食事終り色々残務を整理し午前中かゝる。休暇願提出す。午後は安東に遊びに行き、歸りに吉田の家に行き思ひがけなき馳走になる。午後八時四十六分の汽車にて歸る。

四月四日

今日は第三中隊龍上一等卒の葬儀に參列す。第七列車にて大久保中村氏と笠守將軍も行く。第六列車にて歸る。休暇歸省許可せらる。

四月五日

本日は午前中は弾薬及其他的の仕事をし午後外出す。土産物を見て歩く。夜は吉田の家に行き夕食を共にす。

八時頃歸り別に何にもせず十一時頃迄起きてゐる。

四月六日

内地に歸省決定す。連山關に故瀧上一等卒の葬儀に列席す。

四月七日

今朝午前七時發の列車にて内地に歸る。吉田の御父様見送つて下さる。途中朝鮮鐵道も無事通過す。

四月八日

本朝午前八時頃釜山着。午前十時の船にて下の關に向ふ。船中も異状なし。午後四時五十分頃内地着。午後十時の列車にて再び車中の人となる。

四月九日

流石は特急列車なり。本日の午後二時靜岡着。何しろ如何に早くとも餘りにも待遠しかつた。兄弟母等が驛迄出てくれた。隣の茂兄伯二郎兄も驛に出て下さる。

七年目で初めて會て何より話してよいやら十二時頃迄話す。

四月十日

今日は取敢へず親類廻りをなす何處へ行つても話が長くなりやり切れず。夜は人が遊びに来る。或は招待攻めに會ふやら判らぬなり。

四月十一日

前日に同じ。近所や親類で御馳走になる。夜は廣兄の家に行く十二時頃迄話す。

四月十二日

今日は初めての休みなのに雨で閉口せり。一日近所や村で遊ぶ愈々地方人氣分になり面白し。

四月十三日

今日は青原様と連立ち三郎兄の家を訪問す。竹馬の友も餘り長い間別れて居つた關係で話に花が咲いて半日遊んで来る。

四月十四日

今日は朝から明日の經理検査の準備をなす。午後は兵器検査の準備をなす。夜は色々なし次郎長講談を見て休む。

五月十四日

今日は八時より大隊の經理検査なり。自分の方は案外早く終る。午前中に皆終り午後は銃劍術の檢閲あり。講評三時頃終る。其れより齋藤曹長と町に用事がてら行く。雨に降られて七時三十分頃歸る。

六月二十日

今日は中隊總出で安東相撲大會に行く。午前八時出發、早相撲場は大盛況十一時頃よりリーグ戦初まる。一勝負毎に手に汗を握らす。第四回目に中隊A組は關東廳新義洲と同點になり、第五回戦で守備隊B組新義洲軍より一點五分を奪取した爲め關東廳と守A組と同點となり再試合の結果中隊一點リードして中隊優勝す。

(第四回相撲大會守備隊優勝す)

六月廿一日

本日も滿鮮角力大會の爲め午前八時半頃出發す。本日は昨日に倍し盛況なりき。個人優勝では安東の岩崎君、團體競技では撫順チーム勝つ。午後五時頃終る。夜は中隊長が選手一同に祝杯を擧げてくれる。大いに將來も思想善導體育獎勵の爲め努力する様にと十一時頃休む。

六月二十一日

今日は午前中は履歴表の整理をなし後は宮本中尉殿の化學戰に對する講話あり。其れより練兵場に於て防毒面に對する講演あり。午後五時頃終り、夜は齒科醫の處に行き十時頃休む。明日は連山關に兵器打合せの爲め行く豫定。

六月二十三日

本日は第七列車にて連山關に行く天野曹長と同行す。午前十時二十分着連し兵器委員と先般行はれたる検査の結果に付き打合せあり。午後四時頃終り歸る。

六月二十四日

今日は第七列車にて鳳凰城に川狩りに行く。一行は廣瀬大人以下十五名古田千村の先發隊の準備で城南川を下ること約二千米九時半頃目的地に着く。

午前九時の列車で姉の家にも母と共に行く。午後二時着く姉も非常に喜んで下さつた。

四月十五日

今日は母を川崎に送りがてら兄様達と行く途中横須賀より横濱附近を見て歸る。

四月二十一日

守備隊に歸るのも早今日一日なり。別に何するでなく歸隊準備を整ふ。夜は店の家でラヂオを聞く。青源様と夕食を馳走になる。本日は非常に雨が多い。十一時頃歸る。

四月二十二日

午後九時三十六分の汽車にて靜岡驛を離る。

四月二十五日

本朝七時五十分安東着。已に小濱廣瀬兩大人出迎へらる。其れより荷物の整理。吉田の父武藏屋出迎へ下さる。自分は其れより吉田方で休む。夜七時頃隊に歸る。

五月十日

今日は午前中は兵器検査の準備をなす。午後一時頃より藤永小濱氏と競馬を見に行く。

五月十一日

今日は中隊は北白川の宮殿下士官學生として御渡滿の爲めの警戒に出る。午前午後共其準備で忙しい。本晩は中隊に學生泊る。大變態度服裝及敬禮等嚴格で大いに學ぶ所ありたり。日誌を付けるのをわすれた。

五月十二日

今日は午前四時半起床で安東驛附近に警戒に行く。午後は慰勞休暇を實施さる。自分は外出しなかつた。午前中休む午後は本を見て終る。夜は本を讀み別に何にもせず終る。近頃氣候のせいか仕事をなすのが嫌になり怠け氣分になる。大いに戒むべき事なり。

五月十三日

其れより小林商店の網を借り張りて魚を取りたるも泰山鳴動魚僅かに六、七匹なり。其れより川魚の料理で酒宴を張るビール黨は一箱彈藥携行しありし爲隨分盛況なりき。第二三〇列車にて歸隊して壽旅館にて夕食し一同打揃ひ諸口十九の芝居を見に行く。かくして一日を遊ぶ。

七月二十六日

心に隙を生ずれば必ず危険あり。なくとも危険の近寄りたるを知る。兎角人は精神の緊張が必要なり。春夏秋冬最も隙の多いのは夏ならんか。病氣もこの時季に多く發生するならん。先づ心の隙を根絶すると共に心の病の發生を豫防せよ。然らずんば遂には思はざる不覺あり。

七月二十七日

今日は安東在住未教育補充兵の一泊入營ありたり。昨夜より急に環境が變り色々面白い場面を演ず。午前中一通り教練を終る。午後二時頃歸る。今日は外出もせず午睡をなす。

七月二十八日

仕事に熱心なれ正しかれとは實に名言なるも、いざ行ふとなると思ふ様に行かざるもの。せめて自分だけでも正しく強く生きたいものなり。己れを信じ最後まで奮闘が肝要ならんか。

七月二十九日

實に殺人的の炎暑襲來にて閉口閉口。本日は大隊の特別射撃にて早朝より準備萬端を備ふ。比較的成績は可なり。自分も三十二點なり。午後は其れ等の整理で終る。習字をなす。

七月三十日

國境の旭山に於いて夕涼みをなす。遙かに故郷の空に歸る心を思ふ頃實に感慨無量に堪えぬ。

八月一日

千里の道も一歩より初まる。大いに味ふべきことならんや。良いことしよ、大きなことをなそう、金を貯ふ或は美味を味ふなどと思ふは實に大間違にあらざるや。良いことをするより悪い事をせぬと心掛けるこそ大切なり。すべて之の氣持を忘れざるに依り着々と基礎を固め目的を達することが出来る。

るものなり。

八月二日

昨夜の雨止まず。遂に午後中は雨にて終る。別に之といふ仕事をせず終る。午後用件にて丸山雨南様方に行く。大變馳走になり歸る。夜は珠算をなし休む。

八月三日

さても誘惑の多き時なるか。一身上の事について兎角閉口さる。ぼや／＼しをると午睡の誘惑、時の誘惑、己れに振りかゝる。凡ては皆な誘惑にあらざるか。大いに心を引きめねば後世を案じらる。

八月四日

野間清治氏の出世の礎を見て、感慨無量なり。晴れてよし曇りてもよし富士の山とは實に己れを支配するものならんや。人間すべて何時も氣持良い人となりたし。

八月五日

今日は朝より事務の整理をなす。而して大部整理をなす。午後はキングが来て亂讀して遂に午睡をなす。午後五時より墳合山麓茶屋に於て今回轉任者の送別會を行ふ。皆メートルがあたり大氣焔を擧ぐ。十時頃歸る。人生意義に感ずたとへそれが是又は非にせよ全力を擧げて邁進すべしだ。

八月六日

今日は中隊長の告別式なり。午前九時整列分列式を行ふ。中隊長殿の誠心に力もたゝす矢もたゝす火にも焼けず水におぼれず。

費食の際旭山で中隊の告別の宴を張る。兵卒の餘興でとても盛大なりき。近頃どうもすべらになつた感あり。兎角努力が足らざる様になりたり。自重自重。

九月十八日

今日は酒井雲の浪花節を聞きに行く。十一時三十分頃歸る。午前二時頃俄然非常ラッパと共に飛び起きる。初めは火災かと思へども週番士下宮本中尉は奉天北方虎守備隊附近の鐵橋を支那兵の爲めに爆破され柳條湖分遣隊襲撃さるとの報に接し一同に知らしむる爲めの非常なりと。其れより一同出

動の準備にと多忙を極む。

九月十九日

情況は時々刻々と來り支那北大營攻撃に、第二大隊奉天城攻撃、第二十九聯隊等強者の意氣益々殺氣立つ。中隊は午前三時三十分の臨時列車にて鳳凰城攻撃命ぜられ出動。もう忙しい事食事する暇もなく、出發鳳凰城分遣隊に少體後第一、第二、第三中隊と協力して攻撃に移らんとしたる時準備完了命令を待つ時、姜團長を呼んで無條件で武裝解除完了す。初めの氣合もどこへやらがっかりする第六列車にて安東に歸る。

九月二十日

昨夜中より一同元氣旺盛緊張の一夜を明す。午前中は支那町を自動車にて一巡し歸る。支那町は宛然淋しく暴らしの前の静けさなり。午後十一時沙河鎮分遣隊より鮮支人の衝突ありて急援を依頼され中隊長以下全員出動す。九道溝の支那人朝鮮人と交争し之が鎮壓に當る。交戦一時間敵の三名死傷二名俘虜五十名午前二時引上ぐ。

入營前

横須賀鎌倉地方旅行日より

(同郷友人渡邊美代志宛)

(大正十四年七月十四日横須賀市義兄松澤賢次郎方にて)

英處女旅行日より 其一

懐かしき戀しき故郷を後に、十四日午前九時卅五分の汽車に乗り、初めて目的地且つ親類の姉上の處へ行く。何分にも英に取つては初めての旅行なる故、非常に氣が費され静岡を發してより沼津あたり迄は立ちすめ、随分暑くて扇子と仰よくなりすめだ。十時頃富士驛着。汽車の窓より富士の絶景を眺め、そぞろに自分の襟を正さしむ。夫より一直線に横須賀の乗換地なる大船に着。其途中の景色は非常に好かつた。就中大磯の海岸、逗子の海岸等は絶景中の絶景であつた。

旅行 其二

大船にて約十五分待合室にて休み、横須賀行き汽車に乗る(午後三時)其前箱根山のとんねるは恰も別天地の如く一人淋しき感を覺ゆ約一時間で横須賀に着いたが、自動車で深田町一七六番地に行き、姉様の宅に一泊翌十五日雨天なる故休息晩頃(三時頃)軍港を見る爲めに行き廢艦津輕の爆沈飛行を見物し、軍艦標名に便乗して船内の狀況を案

旅行 其三

細雨をいとせず鎌倉、逗子、江の島方面の見物に行き大佛の大きなのにあきれれる。

此の近邊は最早復興も出來、バラックながらも家が立ち並ぶ。就中、江の島、逗子の風景は敢て言語に例へ難し、再び横須賀に歸宅し翌十七日、十八日は横濱、東京方面を見物する筈。何分田舎もの、事とて見るもの聞くもの皆新奇なる感を覺え兎角田舎ものは生意氣に旅行なぞするものに非らずと云ふ感有り。英もこゝ十日位遊んで行く筈。何卒御部内御一同様に宜しく御傳言下され先は横須賀發東京行きの汽車の窓にて。

旅行 其四

嗚ぞ貴下方も只今は御盆にて且つ競馬もある由。賑かな事と遠察致します何れ詳細は追て面會の節に。時節柄悪病の流行する今日、御身御攝養專一に遊されん事を東都の空を眺めて祈る

遠きが空で彼の地を眺め
月が鏡になれば好い

懐かしき吾友よ 部屋の水田、杉山兩兄に宜ろしく願ひます。

書簡



(昭和七年一月十七日兄鶴吉氏に送りし曹長の絶筆)

入營後

兄鶴吉氏送金爲替不着につき問合せ
(大正十五、十一、十六)

拜啓御書翰拜見致し以外なる事に驚きました。大兄様には澤山なる御金御送り下されたとの御由誠に難有厚く御禮申上候

扱て兄上様には去月二十九日手紙の中に入れて送り下された山、去月二十九日とは十月廿九日に御座りませうか。自分の所には一向手紙などは着きませぬですが、あて名は何と書いて下さりましたか。尙兄上様の所を手紙の裏に書いたならば必ず自分の所へ届かなければ家に歸る筈ですが如何ですか。此書翰の着き次第何月の何日でも宛名はかようのでこの様にして送つたと言ふ事を書いて送つて下さい。自分は一向其んな事は知らなかつたのです。今年十一月十五日初めて知つた様次第です。自分も少々金が入つたから特務曹長に申して漢和大辭典と英語の本を貳圓四拾五錢で貯金を下けてもらふて買ひました。是非之から御金を送るなら書留で御送り下さい。最早中隊の幹部も下士候補者は本を求めの爲めに御金の入ると言ふ事は知つて居りますから何も言ひませんですから御金を御送りの節は書留めに願ひます。ではくれぐれも前申した事を書いて御知らせ下さい。先は時節柄御家内様御身大切に

友人青島源作へ日露戦争の記念にと遙に安東縣より紅葉一葉を封入し送れる
(昭和二、七、四)

G兄御手紙有難う早速拜讀致しました。君等の方は最早農繁期も一段落、落ちついて楽しく且つ愉快なる事はないと思ひます。昨日までは水田なりし所も今は全く青田化し只管其無事生育を祈る事と思ひます。自分等も一期の検閲も無事終了して近頃はとても呑氣です。

自分も幸ひに中隊で六十九人の内第二番で上等兵候補者に入つた、何卒他事ながら御喜び下さい。君よ此紅葉の葉こそ遠く昔し吾が先輩諸子が日露戦争當時の血を吸ひて生育せし紅葉なれ。何卒有意義に且つ永へに御記念あらん事を。さらば是にて失禮します。皆々様にも御身御大切に遊されん事を御傳言を願ふ。

郷里友人青島源作の壯丁検査合格を喜び青年訓練所で精勵を奨む(寫眞を添ふ)
(昭和二年十一月日不明)

やあー戦友しばらくなつかしき手紙有難い。色々勝手を申し御返辭遅れて相済まない。俺の事だから許して呉れ。御目出たう君も愈々現役證書が来たとの由。君の入營地は當獨四大隊とかの事、自分も大に同僚を得て

い事は後便にて

義兄伊東鈴男等へ寫眞を贈り又實印の調製につき問合せ
(昭和三年一月頃)

拜啓時下春暖の候其後以外なる御無沙汰仕誠に申譯なく平に御免下さい其後皆々様益御勝健に御慕し遊さる事と察します。小生相變らず初年兵と軍務に服し居ります、乍他事御安神下さい。扱て農繁期にて千萬御苦勞の事と思ひます何卒農繁期なるとして餘りに體を無理に使はぬ様に家内達者にて本期を終はる様に蔭ながら御祈り致します。

尙ほ此の内に入れたる寫眞は自分が最近に寫したるものであります。良くはとれては無いが一部見等に進上します悪しからず御笑納下さい。又た恐れ入りますが鈴男兄の實印は未だ作つてありません。若し無い様ならば小生支那に於て作製して進上したいと思ひます故手紙の着次第御知らせ下さい。當地は案外「ミトメ」等が安く出来ませ。自分過日作りました兄の物も作つて兄等に對する御恩に報ゆる覺悟です。先は時節柄御身御大切に遊さる様に姉君にも宜しく御傳言の程を左様奈良

昭和三年二月四日誕生日兄へ

前略御免被下度く御懐かしき御家内様には如何御幕らし遊されますか。嗚ぞかし昨今の御寒さも御いとひなく或は山に或は畑に又た麥播にと御忙は

しい事と遠察致します。降て英も昨日滿洲に來たばかりと思ふたのに早や二ヶ年経ました。今日はあだかも英が生れました日であります。二十四年前の今日は駿河の一村柳新田に生れました。其れからは陰に陽に皆様方の御厄介に相成り漸くにして一本立ちとして出来る様に成りました。是も皆様方の御蔭と厚く御禮申上ます。今晩は豆播にて當滿洲に於ても豆や蜜柑を食べました。最早二十四歳といふ年寄に成つてしまひました。村あたりでは自分等と同年のものは早や養子入りするか又は嫁とるかで大方かたづいた事と思ひます。自分も御身大切と其日々を送つて居れば漸々ともパンに食ひはぐれる様な事はあるまいと思ひます故何卒御安心下さりませ。尙先日は兄様にも御無心申上りましたが悪しからず御許下さい。先は今日の昭和三年二月四日は自分の生れた日を永遠に祝福するためとして一本御手紙差上しました様次第です。何卒御身大切に遊されん事を異國の空に於て御祈り致します。

郷里の友人青島源作が安東守備隊に入營につき父彌喜へ祝詞と慰問の爲

め軍隊内の情況等の報知
(昭和三五、十九)

拜復御芳翰有難く拜讀仕候仰せの通り時下春暖の折柄貴家皆々様益々御清榮の段賀上奉り候降て御

事の外嬉しいよ。夫について軍隊の様子色々語り君の未來の参考迄も申したいが異國の悲しさ、語る自由さへ得られんよ。然し君よ心配したもふな。近頃の軍隊は案外楽しいよ。

俺も今度初年兵係になる筈だ。君に参考と成る事が多々あるから君に御知らせ致します。君も昨今は青年訓練所あたりで色々教育されて居ると思ひます。

近頃の軍隊は入營するに訓練所あたりを出ていないと結局自分の損に成るからね。訓練受けないものは初めから別に教育される様の話だから君も一生懸命今の内にやり給へ而し餘りくだらぬ書物を買ふのは見合はせ給へ。

俺が良いと思ふ本は知らしてやるから。買ふなら歩兵教程或は歩兵須知でも買つて一通り読んで置きたまへ。

尙軍人勸諭か、讀法、詔書あたりは良く覺へて来たまへ。入營後は俺が引受けたからなあ。今は大に青訓でやりたまへ。

君の方は只今は取入れ忙はしいだらうなあ本年は豊作との事百姓も元氣がよいだらう。今年は娘等はどうか。少し澤山來たかね。

若者連中は豊年だ。俺も其んな事を考へると鐵砲等は手に付かんよ。

先づ農繁期も近付いて忙はしいだらうな。身體大切にやりたまへ。此れは俺の最近のものが笑つてくれ給へ外の若者連中にも宜しく御傳言下さい。永田君や杉山二郎君にも宜しく御傳言下さい。謹は

蔭にて無事軍務に服し居り候へば乍憚御放神下され度候。

扱て御尊宅にても御令息源作君は此の度び名譽ある軍人として不日御入營遊ばる由邦家の爲め大慶至極に存じ奉り候

國民の義務とは申せ一家を代表し村を背負つて否國家を代表して立つ軍人、これより外に他に名譽なからん然るに御令息様には絶大なる體格を以て合格遊されたとの由。本人は申す迄もなく御家内一同様の御喜び如何とばかり察せられ候

兼ねて源作君にも書面にて御通知申上候如く吾安東縣は滿洲とは申せ氣候風土と云ひ何等内地に遜色之れなく却て内地より住み心地宜しき様感ぜられ候

尙軍隊内にありても内地に比すれば格段の差にて勤務等も割合少なく恰も地方人同様にて候内務等も一個中隊なれば非常に樂にて昔の如く苦勞する如き事毛頭之れなく候小生は申すに足らざる小官なれど出来る限り盡力致すべく又小生としても同郷人の入營するは此の上もなき力だより候へば何卒爾今宜しく御頼み申し上ぐる次第に有之候斯の如き次第に候へば何卒御心配御無用にて御入營遊され度候

御地農繁期にて嗚ぞかし御多忙の事と遠察申上候農繁期加ふるに盛夏の折柄何卒御一統様は御體を大切に遊され無事農諒と相成らん様切に御祈申上候先は亂筆ながら御返事迄斯くの如くに御座候

兄へ兒童教育の注意につき懇なる眞情の吐露 (昭和三、十一、九)

寒さ厳しく成りましたが御家内様には如何ですか其の後は意外に御無沙汰しまして済みませんでした。悪しからず許して下さい。降て英も相變らず達者です安心して下さい。日に日に多忙期に入らんとする皆々様には嘸かし御忙しい事と思ひます。如何ですか本年の稲作は日頃物事に御熱心なる兄様宅の米作は嘸かし良好に結實したる事と思ひます。

耕地整理の後かたづけは出来ましたか。あれやこれやの仕事だらけで忙しい上に尙忙しかつた事と思ひます。(家内全部に読んで聞かして下さい)母上様には如何ですか餘り體を無理するのとつて返しのつかない事になつてしまひます。何卒後生大事と體を大切に御子供を守して下さい。雪や正二や二郎や春は如何ですか。矢張りおとなしく大きくなりましたか。又雪は毎日學校へ行つて居りますか。之からは學問の世の中です。子供の時は「よく」とくもないから御家内様方が其のつもりで勉強させないと一生親たちの頭の土らない様な子供が出来ますよ。子供の教育に意を注いで下さい。終りに兄上夫婦に世の中は天下廻り持ち、如何にかせげばとて其んなに樂になるものでなし、どうか御體を大切に子供の大きく成るまで樂しみて無理しない様に願ひます。自分も今度の試験で大隊で一番になりました。何卒喜んで下さい。何れ後で御伺します。



鉄劍術試合に優勝の報と記念寫眞送付 (昭和四、二、二二)

拜啓餘寒今に去り難く候處御家内御一同様如何御暮し遊されますか、定めし昨今は麥播及梨の手入等で御忙しい事と拜察致します。降て當地も段々と寒さも凌ぎよくなつて来たのですが未だ毎日の様に雪が降て寒さも零下に下りて居ります。本年は初年兵係りで遺憾なく寒さを味ひました。然し至極元氣ですから他事ながら御放念下さい。扱て小生事今同鉄劍術試合で大隊内で一番となり去二月十五日奉天にて開催されたる滿洲の兵隊の鉄劍術試合に於て幸にして三番になり本日歸隊しました。それで其紀念として寫眞を取りました故一枚この中に入れてありますが悪しからず御笑観下さい。次に少し金が入用について再三こんなことを言ふ様ですが下士のつき合ひ等で使ふのでな

いから大至急送つて下さい。何れ御返金は成功の後に、では皆々様益々御體御大切に

鞍山の野營地より郷里宿元に勤務狀況等を述ぶ (昭和四、十、十二) 拜啓 時下秋冷之候其の後の御家内御一同様如何御消光遊ばされますか定めし昨今は農繁期を前にして御忙しい事と遠察仕ります。如何ですか本年の農作物の景況は、兄上様の熱心で良好なる成績を収める事と思ひます。

英もお蔭様にて至極達者にて目下鞍山野營地に於て毎日中隊教練大隊教練にて鍛はれて居りますから他事ながら御安心下さい。 本日は恰度中隊の檢閲も前段の演習終了し鞍山東南方高地に於て休憩中 二十年の昔を偲ぶつもの、

私も九月頃より中隊の兵器係を命ぜられ身に餘る重任で甚だ責任觀念を感じざるを得ん有様です。爲めに忙しい事と、なれぬ仕事で閉口して居ります。然し段々と仕事もなれて来まして昨今は辛うじて其の責に任じて居ります。 歸營すれば大隊の特別射撃又は兵器檢査等でまた忙しい目にあふかと思ふと野營演習の方がはる

かになりましたと思ふ様な感じがします。

私も色々な都合で長らく御無沙汰致しましたが決して母家を忘れたものではありませんやはり責任觀念で遂に御無沙汰のみ悪しからず。

御蔭様にて過去五ヶ年間大過なく軍人の本分を完了しました故他事ながら御安心下さい。 本年暮頃より仕事の方も少しは暇になります故歸省したいと思ひ居りますそんな事を思ふと居ても立つても居られん早く歸つて故郷の皆々様の健全なるスタイルを見んと一日千秋の思で待つて居ります。

皆々様も多忙期も近づきますれば御體を御大切に遊ばされ無事農繁期を過ごされん事を異國の空に於て祈り居ります。 御知友諸兄様にも兄上様より宜しく御傳言の程を祈る

(五、一、一)

兄鶴吉氏女春子嬢へ

おめでたうございます。

元 且

兄同氏 男二郎君へ 同

しんねんおめでたうございます。

元 且

兄鶴吉への禮狀 (昭和五、二、二二)

拜啓 春とは名のみにて餘寒未だ去らず吹く風肌をそよつくの昨今皆様如何お暮し遊ばされますか。

扱て過日は珍しき物澤山有難うございました。吉田様も皆大喜びです。では亂筆ながらお禮まで先は用件のみ 敬具。

靜岡市友人中島の川島三郎の新婚を祝し自己將來の希望を述ぶ (五、三、八)

三郎兄長い事失禮致しました。許せ 貴兄の新婚を祝せざる得んない。定めし楽しいホームを作つて居る事と思ひます。どうですか寫眞でも送つてはくれんかね。俺も目下無官の大男だが決し君の妻君をどうこうとは申さん。確に誓つて置くよ。而し之は青島などと想像して大方結婚されたらうと判断したのだが萬一違つて居たら悪しからず。

吾輩に無断で結婚するとは餘りだぞ。 其中分として寫眞を送れ。いや送つてくれ給へ但し妻君と二人のをなあ。 青島君も五月には除隊するから餘り隠さずに眞實の返辭を呉れ給へ。

俺も長い事内地に歸らんから家の方の様子が判らんが随分變つたらうなあ。其内には一度位は歸るから又緩々と話す折もあるだらう而し俺は内地には一時は歸るが永久には歸らんぞ狭い内地には俺の住家はないらしい。やはり滿洲あたりでごろつくのが適當らしいよ。人口問題、食糧問題の騒しい御國に御奉公と思ふよ。だがね、君よ滿洲も随分近頃は行詰て相當就職難に苦しめられ高等遊民も随分あるらしいよ俺も若も軍隊をやめたら緊難一番黄塵萬壘の廣野に飛出し茶葉服に身を固めて大に働くつもりだよ。君々の理想は先づ熱を以て

働くにあり。どうせ思ふ儘にならぬ世間だからさ俺もこの四月には恩給二八〇米貰ふ資格があるんだがまだ二三年は軍隊に厄介に成るつもりだよ。まだか、あなど問題は外だ。前途未だ遠々たりたアハアハ 無妻の大男も衣食住には差支ないから大きな事が云へるよ。まあこれ位でやめて置かう。精々君も妻君を可愛がつてやつてくれ。折角體を大切になあこれは俺と青島との寫眞だが君等との交換條件の下に送るから穴のあくほど見てくれ給へ。ウソ、顔に穴があいたではどうもならん失言取消す。

郷里安東村の友人杉山廣へ春になつて故郷の事特に四月一日よりの淺間神社祭典など思出され寄せたるもの (五、三、二五)

拜啓 光陰は矢の如し貴兄等と御別れしてより早や五ヶ年に相成り何時も御無禮勝にて恐れ入ります。 皆々様其後御變はりはありませんか。降て小生御蔭様にて無事軍務に精勵致し居りますから御安心下さい。 何時も家の事は御世話様に成ります由有難く厚く御禮申上ます。今後共何分宜しく御後援の程を御願ひ申上ます。 御地は目下絶好の季節で野に山に定めし賑やかな事と御察し申上ます。淺間神社の祭典も近付き櫻の香に酔ふ弱輩共緊縮を他所に見る國賊が賤機山一帶を占領し花に酔ひ鳥に歌ふ有様を目前に浮べ

ては私の故國にありし日を思出されます。當地も漸く春らしくなり柳の芽も將に出でんとし四方の草木も皆春の仕度に取りかかり、天はさながら深夜にサーチライトにでも照らされた様に明るくなりました。限りある櫻は後二ヶ月位で開花する由櫻樹の下にありて兒島高徳を思ひ出す時期も遠からず参ります。何れ其節は御地の情況御知せ申上げます。段々と農繁期も近づきます事と何卒御身御大切に末筆ながら皆々様の御幸福を御祈り申上ます。御知友皆様にも宜ろしく御傳言の程を。二仲 誠に恐れ入りますが三郎君の中島に居る事情を御知らせ下さい。

兄鶴吉へ昭和五年四月九日歸省し四月十九日渡滿後送れるもの (五、五、四)

前略 大變暖くなりました皆様相變らず元氣の事と思ひます。降而小生歸隊後至極元氣で服務して居ります故御安心下さい。

扱前向には歸郷致し随分厄介かけました家に歸つて色々變つた事や物珍らしい事があつてどんなに嬉しかつたかわかりません。然し今家に歸つた事等考へるとまるで夢の様です。

當地は恰度櫻の花が咲き初めです氣候は一番よい季節です御地は大變暑くなつたでせうそれに段々忙しくなるしお茶も早始まつた事とせう。

やはり不景氣でお茶も安い事とせう然し不景氣は百姓のみにあらず貳參萬圓も體にかけて漸く學校を出た大學生ありたりが失業してゐるんだから

まあ食べるに困らなければ結構な事ですどうせ此の世の中は面白く暮すが肝要なればまあぼつ／＼やりたまへまた景氣も良くなるでせう。時に御約束の金子在中してありますから使つて下さい但し(五〇〇)なり上兄の家やなほ様の家もまあみてやつて下さい。

兄へ奉天旅順等の見學の知らせ (五、五、七、旅順より)

戦績見學より。五月一日俺達の一行は見學の途に上つた汽車は櫻の安東を後にして北へ北へと進み撫順に着いたのは翌日の午前八時頃であつた。生憎雨に見舞はれて閉口せり。而し雨中の露天城見學も又格別なりき。其れより奉天を見學して車中の人となつて旅順に向つた。翌朝の八時頃旅順の人となる。爾靈山に立つて地下に眠る英靈を弔ふ時はうたゝ感慨無量の感にふける。目下旅順は櫻の満開で、とてもたまらん。一行は三十五名旅順陽長館に投宿。明日は星ヶ浦大連を見學する豫定。餘は後便にてお知らせ致します。

兄へ下士志願につきて (五、六、四)

謹啓 時下梅雨の折柄皆々様如何が御暮し遊ばされますか其の後は久々御無沙汰致し平に御許し下さい。降て不肖相變らず軍務に服し居りますれば他事乍御休心下さい。

御地は如何ですか當地は梅雨とは名のみにて毎日／＼暑くて日中は百度以上に成ります。只今自分分は輕機關銃修業の爲め風凰城といふ所の守備隊に居ります毎日／＼輕機關銃を持ち廻らなければ

一日拾八錢參厘はもらはれませんよ。

扱て今回私事多年の宿望たる下士志願致し度中隊幹部にも相談したる所御許可下されし故別紙の承諾書に何卒兄の御印下され度御願致します。

御兄君等も御承知の如く滿洲は滿四ヶ年居れば恩給が付く故實に楽しみです。貴兄様方には只今は農繁期にて嘸御つかれの事と思ひますれど此の手紙着き次第早速御送付下さい。では皆様に何卒御身御大切に來るべき農繁期に奮勵あらんことを祈る。

尙ほ本年は耕地整理やら仕事する者の少い爲め色々仕事が遅れた事と思ひます。こは體が一番大切で體を大切に勤めて下さい。皆々様にも宜しく上足の姉や大谷の姉にも宜しく御傳言の程を。 (五、七、二二)

兄へ暑中見舞ひ (五、七、二二)

拜啓 大變暑くなりました本日は結構なる銘茶澤山有難う御座いました。尙〇〇の中實は私より差上べくの處、恐縮に堪えませんが。折角のお好意有難く頂戴致しました。時に紙上にて拜見したるに貴地は暴風雨ありし由何かお變りありませんか被害も相當ありました山時節柄皆様御體御大切に

兄長女雪江へ細ま／＼と訓へ諭す (六、三、二〇)

雪枝さんに。二三日前に伊太郎君からの手紙によると、皆な丈夫で面白くあそんで居るとの事。あなたも尋常五年生にもなつたら自分からなんでもやつてる事と思ひますが、十二歳になつたら人

のやつかいにならん様に小さい子供を見てやつて下さい。なほ子供の時は勉強する子がおしまひには偉い人となるのです。正二や二郎や春ちゃん等と毎晩勉強して居る事と思ひますが、學校から歸つたら必ずその日に教つた事をお習ひするようにせんとためです。正二、二郎、春子などによく聞かせて一生けんめい勉強せんとためです。後五〇日位たつたら私も家に歸れるかもしれせん(四月頃)其の時みんなにお土産をたくさん買つて行くつもりですから、しつかりやりたまへ。人の云ふ事を聞かぬ子や勉強せぬ子には何にも買つていかんから皆な貰ふことのできるように大に勉強して下さい。御両親様や御伯母様によろしくさようなら

近況を記して兄へ寄するもの (五、七、六)

段々暑さも激しく成りました事何卒御體を御大切に遊ばれる様又上足洗の姉や悦様なほ様等にも宜しく御體聲下さい。何れ又た餘は後便にて。

暑中御伺ひ申上候

兄上様大變御暑く成りました。其の後の御家内様には如何ですか。定めて昨今は田の草の時期で御忙しい事と思ひます。夏に成るとあの蒸暑い稻の中で肥料の臭と炎暑とで苦められた事が思ひ出されます。降て小生御蔭様で目下當地は百度を二十度位突破して居る處で、至極元氣で軍務に服して居りますから御安心下さい。御母上様及御令閨様には如何ですか御知せ下さい。扱て今回當滿洲守備隊も増設される事に成り

ました。いづれ私も或は他中隊に編成替に成るかもしれません。又中隊長の抜擢で今回軍司令部に履歷書を出しましたから軍司令部の方に行くやもわかりません。然しまた本當の事は判明致しませぬ。何れ後便にて。尙去る六月の移動で吾々の同年兵の内三名三等級に昇進してその中に私も入りましたから御喜び下さい。何時も御無沙汰勝ちで誠に相済みません何卒御許下さい。

兄鶴吉へ時候見舞ひ (五、一、一七)

拜啓 秋冷の候寒さ日に加る折柄御家内皆々様目下取入之候にて定めし御忙しい事と思ひます。皆様御達者ですか私も至極元氣です安心下さい。時幸に天高く蘭花薫る候稲刈に麥播に御奮闘の上無事昭和六年の新春を迎へられん事を 匆々。

兄へ伊豆地震の見舞 (五、一、二、初め)

拜啓 今朝来の新聞によれば貴地は地震起り莫大なる損害あります由。御家内御一同様には如何に御座りますか實は非常に驚きました様次第です至急狀況御知らせ下さい。先は取急ぎ御見舞まで

竊母イマに昭和五年末に寄せたるもの (日附不明)

拜啓 建者でゐますから御安心下さい。此れは本年内地に歸つてお母様に何か買ふてやるかわりに甚だ少しばかりですが御笑納下さい來年に成つたらまた歸る事も出来るかも知れんが本年は歸れんから何卒左様御承知下さい。子供もお母様の世話で定めし大きくなつた事と思ひます來年歸る時は澤山土産を持つて行かう皆の云ふ事を聞いてまつて居るやいと話して下さい。

ではお母様も老齡の事折角御體を御大切に無事正月を迎へます様滿洲に於てお祈りします。母上様 英より

兄鶴吉へ時候見舞ひ (六、三、二五)

兄上様 大變暖くなりましたがお變りはありませんか。又本年も懐かしの春が訪れて参りました。雪江も正二君や二郎君も皆達者ですか。お母様も子供の世話で定めしお忙しい事とせう。私も昨今は比較的暇で、勉強に餘念ありません故お安心下さい時節柄お體大切に。

郷里友人伊藤惣作外數人滿洲本溪湖守備隊に入營前に同人に寄す (六、五、十一)

前略初夏の期節と成りました。御地は目下茶の期節で御忙はしい事と遠察致します。當地も今は櫻の花が満開です。其後は貴兄等は入隊の期日も押し迫り毎日不安の日を送つて居る事と思ひます。而し惣作君案ずるより産むの安さで案外軍隊生活も面白いものです君達の神戸集合は何日頃ですか。二十五日頃ではありませんか。マア今の内に大に英氣を養つて置き給へ。時に君達の入る隊の班長及班付上等兵の氏名の件其後問合はせたるも來三十日滿期除隊する者が除隊近く(二十日過ぎ)に非らざれば判明せざるとの由本日本溪湖高島軍曹より返信ありたるにつき右御承知下さい。君達の在郷中判然せざりしを遺憾とします依て小生の名刺在申しありますから入隊

後高島君に面會せられたく小生よりも書状出し置く筈なれば外の入管者にも左様御傳達下さい。時節柄御身御大切に

婚約に關し義兄伊東鈴男に寄するもの(六、七、七)

拜啓梅雨の候益々御健勝にて農事に御勉勵の事と思ひます。田植も大方終りは致しませんか定めし多忙の日を送つた事と思ひます。

扱て甚だ變な事ですが實は香谷の(立石)の川口七太郎様より小生宛二十一日付書状で清水の入江受芝田某家に養子に行つてくれと依頼されたのでまだ結婚問題等を別に考へては居りませんのにそんな手紙を買つて實は驚いた様なる次第です。手紙の様子では柳新田の家と親類の間柄とか自分は別にそんな家は固より知らず猶更娘等は知ません。それで一應郷里の兄や母と相談の上返事すると手紙を出して置いたのですが甚御多用中恐入りますが事情を良く聞きて御知らせ下さい川口家に行けば判明する筈です。殊に小生とて結婚問題は男女の一大事で事將來に關する事なれば例へ近く結婚するとしても再考にノを重ねたくと思つて居ます。尙身は目下軍籍に置以上明日も不明なる體なればと云へ一生獨身で暮らす氣はあらず一應調査だけはして見ても決して不可ではあらざる故甚勝手ながら左記事項につき調査方御依頼申上ます。

一 柳新田の家とどんな親類なるか

二 其家の素性家柄

様への申譯と併せて貴會の益々發展進歩を祝福する次第であります。

滿蒙問題と青年の覺悟

時は丁度八月四日午後九時頃であつた。私は机に向つて書物を読んで居ると驛の方向に萬歳の聲が聴える。何事ならんと同席の友人に訊せば夫は在滿青年聯盟會の母國遊説代表が正に國境安東を立つ際の志士の雄叫びである事が判つた。私は斯く迄滿洲も行詰りやと少時滿蒙の現状に就て默考する時、現在の滿蒙問題等より見て實に當を得たるものと思ひ知らずノの内に彼等重大使命を帯びて母國遊説の途に上らんとする諸氏の成功を祈つたのである。

諸氏も既に御承知の通り、吾が滿蒙は吾國が過ぐる日清日露の兩戰役に於て二十有萬の英靈と貳拾餘億圓の大金とを犠牲として三國干渉の義憤を晴らし得たる貴い紀念物であり、又吾先輩の血の結晶である。而も吾滿蒙は吾國の經濟上より又國防上より見て無くてはならぬ所である。此血の雨を降らして漸く固め得たる權益を中國が奪回せんとするのが、即ち今の滿蒙問題である。然らば中國人が國を擧げて叫び且つ叫びつゝある問題は何ぞや曰く治外法權撤廢曰く、旅大回收曰く、不平等條約の放棄、曰く駐滿兵撤廢等曰く何々と實に枚擧に遑ない。果して現在の中國にして右の如く大言壯語する價值ありや。漸次眼光を轉じて中國を見るに蒋介石により革命は成功し全國統一せりと雖、今に戦火の絶ゆるを見ず、國民は常に戦火に見舞れ窮乏其極に達し、馬賊の横行、官兵巡

三 其家の財産の有無
四 娘の學歴、素行、體格、技倆
五 家内の様子職業

尙兄が見た處の兄の意見を腹藏なく認め下さい。右の様な事は柳新田の家にも頼んだが取急ぎ兄にも御頼致します其上で小生の意中を皆様に御傳へしやうと思つて居ます。

だが小生は寫眞結婚や手紙での口約はせぬつもりです又た自分の前途の希望もありますれば結婚するせぬは判然せざるに付きするにしても目下は不可なれば二三年経過し行ふ豫定です。色々前途に思ひを致せば暗雲低迷して判断に苦む、兄の公平なる御批評を乞ふ、別に急ぐものにあらずれば餘暇を見て調査して送つて下さい。

二 仲 おなほさまの入齒は幾圓位かゝる豫定か併せて知らせて下さい。

婚約につき兄に送る (六、七、七)

拜啓 御蔭様で達者で奮勵致居候間乍憚御安心下されたく候扱て小生の配遇者の件に就いては種々御高慮相煩はし誠に難有厚く御禮申上候、就ては色々と熟考致したる結果、寫眞若は手紙にては一身上最も重大なる婚姻は小生にしては致し兼候尙本人同志或は先様で親しく御談の上にて双方理解ある結婚を希望致し居候元來小生は茲三四年は結婚せざる覺悟に有之候付何卒先様にも右様な次第御傳へ願度候

近日中に香谷立石區川口七太郎様か或は清水より何かと言ふて來る筈に付念の爲め

時下夏期日に加はる際皆様折角御體を大切に

姉ナオの窮狀に就き衷情を述べ (六、九、一〇)

兄様近頃は朝夕は大分涼しくなりました、御家内皆々様御一同達者で御暮しの事と思ひます、降而小生事相變ず元氣にて國防の第一線で邦家の爲赤誠の誠を盡して居ます故他事ながら御安心下さい。

扱て御地は目下不景氣の絶頂に遭遇し定めし日常の御生活も御不自由の事と思ひます。

就いては先日母上様よりの音信によればおなを様の家も此の不景氣で少なからず困却致し居るとの事と實に同情に堪えませんが、おなを様の家も日頃の家のやりくりが悪いのはやはり一家の事は女にありますからぬ

よく色々事を聞かして家計上手にやれるやう兄としてよくノノ注意して上げて下さい。

而し兄様何と云ふても血を分けた兄弟ですからある程度迄之を見てやる義務あるのだから少し位の事は目に見てやつて下さい御願致します。

また景氣でも立直つたらなんとかなります。私も別に御金もないが、送りたいと思つて居ります。段々忙しくもなり寒も段々激しくなりますれば皆様御體御大切に

日支事變勃發直前報國の至情ありて感想を述べて郷里安東村青年團員を(六、九、一五)

前同貴團支部長殿より故山の青年團に文藝部出來たから滿洲の事情を寄稿せよとの切なる依頼にあり、素より淺學短才を顧みず聊か拙文を認めて皆

警等が馬賊に早變りなどの珍現象は實に中國に非ざれば見ざる事なり。

條約も道德も彼等の前には一片の紙屑に價せずである。此等不良の徒を煽動して名を排日排貨に借り打倒帝國主義を叫び、傍ら勢力争ひに餘念がない、現在より斯る言は時期尙早過ぎるにあらずやと、私は思ふのである。日露戦争によりて露國よりの侵略を免れ得たる恩義も忘れ、日本との戦争も敢て辭せずと豪語する輩あるは實に言語同斷の極である。

斯る言を敢て壯言するは果して何を意味するや申す迄も無く某國が其裏面に暗中飛躍しあるは疑ふ迄もない。

列國は競ふて此國際舞台上にある中國を如何にか料理せんと苦心して居るのである。

見よ太平洋の彼方には〇〇ありて虎視耽々たるあり近くには〇〇〇〇あり彼は産業五ヶ年計畫も着々と成り其魔手は南方へと逐年露骨になり來れり。顧て吾國を見るに内は財政難によりて、不況は日一日と深刻となり、國民の思想は益々悪化し來り外は對支外交を初めとし事毎に衝突し此際一步を誤らば……實に危急存亡の秋に當面せるなり。此間に處する諸氏青年は有事に際し不覺を取らざる覺悟と決心こそ大切なれ。徒に不況に泣く時に非ず奮然起つて國民の中堅となり此一大難關を突破し國家を泰山の安きに置くを得るも得ざるも皆諸氏青年に待つ事多し好漢自重せよ。

添書

滿蒙事情について尙詳しく述べたきも既に諸氏は

日支事變後

同村より滿洲に出兵せる伊藤惣作の
行動及事變一般を父源太郎に告げ慰む
(六、九、二〇)

前略滿七年の軍隊生活に於て鍛へ上げたる此體愈々君恩に報ひらるゝ時節到來せり元氣益々旺盛にて奮闘致して居ます貴家より御送付下さる新聞有難く毎日〴〵喜んで見て居ます。異郷の地に於て而も戦争中に新聞に依り生地を知る事が出来てこんな嬉しく懐かしい事はありません。當地の情況も既に新聞にて御承知の通りと思ひますが相手が支那人なる爲め別に大した事はないが何しろ最近馬賊が頻發に出てゝ其爲め一日に二三回出動する様な状況で實に忙はしくて閉口して居ます。

滿洲の主要なる土地は既に日本のものとなりたる様なわけです。恐くは此れ位で事件も落着く事でしょう奉天北大營附近の戦争にて日本兵が若干負傷したり死んだ者がありますがあれは油断した爲め緊張して警戒して居ればまあ大丈夫です、滿洲は支那兵より馬賊の方が恐ろしく彼等は不意に奇襲して來るからあれには日本兵も一本參つて居ります。
(本年一月十八日安東縣匪賊討伐に向ひ其奇襲により(君は奮闘して名譽の戦死なり感ありしものか)夫に又戦地には流言飛語が盛に行はれる事が度々あります。)

鄭家屯より靜岡市安東町柳新田青年

團員へ慰問品の禮狀 (六、一、二、一三)
拜啓今回は御鄭重なる御慰問に接し誠に難有厚く御禮申上候

陣中に於て皆様より下さる慰問品を抱き陣中の勞を慰する時こそ眞の吾々の慰安に之れあり候、早速頂戴一同にも分配致候小生其後内蒙に駒を進め目下四洮線の警備に任じ居候當地は四圍の村落には馬賊團散在し殊に通遼には敵の一大騎兵集團ありて虎視眈々とし吾に挑戰態度を示し居り將來吾々も此等の輩共と一戦を交へらるゝと喜び居候當地は御承知の内蒙に連なり砂漠地帯多く蒙古風を雪を混じり歩行にさへ尠ならず不便を感じ居候寒氣は日増しに加り毎日零下二十有餘度に上下致居候もマダ〴〵此上寒さも加はるとの事に有之候第一線チ、ハル錦州附近の戦況は皇軍各地占領後其大部は附屬地に引上げ待機致居目下近く嵐の前の靜を守り居候、近く一大決戦も近付きつゝある模様にて一同緊張の日を送居候

先は取り急ぎ御禮まで申上度く團員各位にも宜しく御禮申下され度時下日増寒氣加る折柄折角御自重の上共に國難に當られ度遙かに内蒙の一角鄭家屯より御願申上候
詳しく戦争の情況御通知申上度も出動に出動を重ね餘暇を待つて何れ近く戦争の情況御通知申上べく候 敬白

安東小學校長杉原二郎の慰問に答ふ
(鄭家屯六、一、二、一三)
前略

貴家の惣作君の大隊は奉天北方新民府と云ふ所に最初に出動しましたが其後又移動したらしいから判然と分かりませんが支那兵相手の戦闘だから心配する程の事もないと思ひますから
今日は情報も大した事がなく休みも同様ですがもつと早く手紙を出したいと思つて居りましたが昨日迄はとも忙はしくて書く事が出来ず悪しからず何れ變つた事は後便で御知らせします。左様なら
從兄岩崎伯次郎へ洮南より送れるもの
(六、一、二〇)
内蒙の原野に起ちて遙かに貴家の幸福を祈候
目下吾が第一線部隊は三十有餘度酷寒と闘ひ十八日拂曉全線攻撃開始前進中余は其後洮南に移動し警備に任じあり

郷里青年團、在郷軍人に皇軍の狀況 及其意氣を報じ國論の統一を促がす (六、一、二五)

謹啓我が滿蒙に急變起り吾々守備隊員出動の報傳はるや逸早く小生等の爲めに或は御慰問狀を或は御武運長久を神佛に祈願下されしと見より承はり誠に難有厚く御禮申上候御蔭を以て事件發生以來國民の總意を背負ひ滿蒙權益擁護の爲め日増に加はる寒氣と闘ひ奮闘致居候間乍他事御安心下され度候
事件は前に溯り一寸當時の情況御知らせ申上候
事件發生以前より支那毎日排日行爲は愈々露骨となり例の中村大尉事件或は萬寶山事件或は何々事件等相續して起り排日毎日其極に達し其横暴は實に目視し得ざる有様となりタマ〴〵支那兵の

吾が滿蒙に急變起り吾が守備隊員出動の報傳るや逸早く我々の爲め或は御慰問狀を或は武運長久を神佛に祈願下され誠に有難く厚く御禮申上候
御蔭を以て小生事件發生以來國民の總意を背負ひ滿蒙權益擁護に日増に加る寒氣と闘ひ奮闘致し居候間乍他事御安心下度候、殊に本日は幼兒諸君の御鄭重なる御慰文御送附被下誠こもる小國民の慰問狀を手にして陣暇を利用し拜見する時こそ眞の我々の慰安に之有り候
事件發生當時早刻當地の模様御通知申すべく之處出動中却て御慰問に接し甚だ赤面の至り何卒御許し下被度候甚だ遅まき乍ら當時の情況一寸御報申上度候
事件發生以前より支那の毎日排日行爲は日増に露骨となり例の中村大尉事件或は萬寶山事件等相續して起り其の他大小の排日行爲は言語に不堪其の都度吾が外交部よりの嚴重なる抗議こそ又一片の抗文に終り誠に吾々武人の間に不堪る事幾度か有之候

排日の宣傳の如きは小學校の教科書中まで入れ其の他個人的の危害又數ふるに暇あらず偶々横暴無智なる支那兵の滿鐵線爆破は遂に今回の事件を勃發致し候
時恰も九月十九日午前二時吾々は非常喇叭に夜半の夢は破られ營庭に整列し速刻臨時列車により或は支那兵の武裝解除に或は要地の占領にと東奔西走し遂に滿洲全土を數時間にして占領し今や到る處秋空高く日章旗翻り居らざる所之無く候
皇軍一度起れば吾が鎧袖だにも振れ得ざる有様に

滿鐵線破壊及び吾が守備兵隊襲撃に因を發し遂に今回の事件勃發致候
時恰も九月十九日午後十時吾々は非常喇叭に夜半の夢は破られ臨時列車にて支那兵の武裝解除或は某要地の占領にと南戦北馬其神速なる皇軍の行動は僅か數時間にて遂に滿洲全土を占領致候其後敗殘兵及馬賊等の出沒有之候も素より算ふるに足らざるもの共のみにして今や各地共概ね平靜に歸し支那住民の如きは却て軍制下にあるを喜び居候
斯の如く吾が滿蒙の特種權益を侵害するに於ては斷然之を擊滅するに非らずんば吾國家百年の計を安んずる能はず東洋永遠の平和の爲め皇軍一度起れば向ふ所敵なく滿蒙の天地には秋空高く日昇旗翻り居候
此間國際聯盟起ち候も正義の爲めには聯盟何等恐るゝに足らず英米たりとも敢て一戦を辭せざる皇軍の意氣に有之候、滿蒙にある皇軍は國民の總意に沿ひ奉るべく零下四十餘の酷寒と闘ひ奮闘致居候間乍他事御安心下され度今や輿論の統一を必要と致し居候間貴團員先づ卒先陣に起ち輿論の喚起に務め下されたく而して剛健なる國民精神を以て此國難に善處下さる事を陣中より一重に御願申上候

甚亂筆ながら一書を呈し皆様の御厚恩に謝する小生の微意を御傳へ度斯の如くに御座候 甚だ御多忙ながら團員各位様にも貴殿より御禮聲の程御願申上候、時下日増に寒氣加はり殊に農繁期の事折角御體御大切に

て其の間聯盟起ち云々問題起り候も元より正義の爲めには聯盟たりとも如何ともする能はず東洋平和維持の爲めには敢て英米たりとも一戦を辭せざる皇軍の意氣に之有り候、小生其の後吉林に或は四洮線又は洮昂線附近に轉戦し目下再鄭家屯に來り守備隊本來の警備に任じ居り日頃の皆様の御期待に沿ひ奉らんと奮闘致し居候間何卒御安心下され度候
當地は四圍の部落には馬賊團散在し居り殊に通遼附近には敵の一大騎兵集團ありて將來吾々も此等と一戦交らるゝ事と樂み居り候
御承知の如く當地は内蒙に續き居る關係上砂漠地帯多く蒙古風に砂雪を加へ水には尠ならず不便を感じ居り候
第一線チ、ハル錦州附近の戦況は一段落を告げ其の大部は一先づ現住地に引上げ待機中今や嵐の前の靜けさを守り居り候、近く一大決戦を豫測され極めて緊張の日を送り居り候
當町出者伊藤、深澤、望月の諸氏も洮南附近の守備に任じ居り常に赤誠を以て終始致し居る模様にて有り候へば他事ながら御安心下され度候
時下日増に寒氣加り殊に國民の輿論の統一を益々必要とする折柄折角御自重の上國難を善處下被度内蒙の一角より遅かに御祈り申上候
甚だ略式ながら御禮まで申上度職員御一同様並に兒童一同にも宜しく御禮申下被度候 敬白

群馬縣沼田町叔山莞爾の慰問に對し
禮狀 (鄭家屯六、一、二、一三)

拜啓本日は御鄭重なる御慰問に接し誠に有難く厚く御禮申上候
皆様の下さる慰問品を抱く時こそ眞の吾々の慰安に有之候
小生等も其後皆様の日頃の御期待に沿ひ奉るべく所々に轉戦し目下四洩線の警備に任じ居り候
當地は馬賊團も所々部落に散在し居り將來吾々も此れ等と一戦交へる事の出来るを樂しみ居り候
當地は早や白皚々の雪原と化し毎日零下二十有度を上下致し居り日増に加はる寒氣と闘ひ奮闘致し居り候間乍他事御安心下被度候
時下日増に寒氣加り殊に國民の輿論の統一を益々必要とする折柄折角御自重の上國難を善處下被度遙に内蒙の一角より御願申上候
甚だ略儀ながら御禮申上度斯の如に御座候

横須賀市義兄松澤賢次郎夫妻に出動
部隊の報告を述ぶ
(六、一二、一八、鄭家屯)
謹啓嚴寒の初本年も押迫り餘す處十餘日と相成り歳末の整理或は新年への準備にと何かと御多忙の事と遠察仕候
殊に本年は一大國難に際會し國是の總決算に國を擧げて奮闘の折或は在滿武人の慰問品の蒐集に或は國論の統一に御健闘の事只々感激に堪へず候
其後の御家族御一統様には御變り無之候や汀君功君も恙なく御教育の事と思ひ居り殊に功様は可愛さも一段増し一家團樂の中心となり居る事と思ひ居候
四鄭線鄭家屯にありて守備隊は本來鐵道警備に任

じ居官製私製或は職業馬賊共又は張學良の別働隊の出沒多く之が討伐に閉口致居候當地は氣候の急變甚だしく夜間は通常零下三十度を上下致し居糧米其他材料の不足は尠からず困難を感じ居り内地より慰問品或は隊よりの加給品に依り辛ふじて間に合せ居候加給品の酒では野戰氣分を大に發揮致居候第一線の戰況も其後學良の失脚は皇軍の現任地歸還により嵐の前の静さを守り居候目下皇軍は遼河一帯線に進出待機中近く結氷と共に或は錦州攻撃も行はるゝやも計られず爲めに小生等も當地なれば御正月は此地ならんと思居候歳末も後旬餘日日頃の缺を補はんと益々元氣奮闘致居候へば何卒御安心下され度候
時節柄向寒の際折角御體御大切被成下度候
東京市淺草區猿屋町一七村田藤子へ
鄭家屯より慰問品の禮狀
(六、一二、一六)
謹啓
本日は御丁寧なる御慰問品に接し誠に有難く御座います
陣中に於て皆様の下さる慰問品を抱き陣勞を慰する時こそ眞の吾々の慰安で御座います
吾々も其後或は四洩線に或は洩昂線に轉戦致し再び鄭家屯に來り國民の總意を双肩に荷ひ、吾が滿蒙權益擁護の爲め奮闘致し居りますれば何卒御安心下さい
當地は沿線到る處馬賊共も散在し居り、毎日之等を相手に警備に任じて居ります
第一線の戰況は第一戰部隊は一時現住地に引上げ

靜岡師範學校寄宿舎杉山春彦氏及生徒へ鄭家屯より
(六、一二、一九)

謹啓横暴なる支那兵の滿鐵線爆破は遂に今回の事件を勃發せしめ、吾が守備隊出動の報傳るや或は慰問品或は吾が武運長久を神佛に祈願下され誠に難有く感激致し居候
其の後支那兵の武裝解除に、或は要地占領にと、國民の總意を双肩に荷ひ内蒙鄭家屯に來り、守備隊本來の任務鐵道警備に任じ、日増に加る寒氣と闘ひ奮闘致し居候間御安心被下度候
滿蒙は申す迄もなく吾が國の生命線にして是を侵害するゝに於ては斷然排撃するにあらずんば國家百年の計を安んずる能はず候爲めに皇軍奮然起ては向ふ所敵なく吾が鎧袖だに觸れ得ず今や滿蒙には竿頭高く日章旗の翻り居候
當鄭家屯附近の部落に匪賊共多く之が討伐には閉口致し居候
第一線の戰況は皇軍が一時現住地滿鐵附屬地に引上げ待機し居、目下嵐の前の静さを守り居り候も近々錦州攻撃を控へ緊張の日を送り居り候
詳しく戰争の情況等御報申すべくも秘密に關する事等有之候へば何れ後日御報知申上べく候
甚略儀ながら御禮まで申上度時下日増に寒氣加はり殊に輿論の統一を益々必要とする折柄何卒御自重の上國難に當られ度遙に内蒙の一角より御願申上候
甚だ御手数ながら寄宿舎生徒御一同にも宜しく貴君より御傳へ下され度候

杉山春彦殿
外生徒御一同様

鄭家屯藏重中隊
杉山英

遙に鄭家屯より燃ゆる憂國の至誠より國民の抱負を述べ郷里安東青年團員へ滿蒙開拓の爲め渡航を勧むるも
(六、一二、二二)
拜啓本年も餘す所尠く本年總決算に或は迎春への準備に御多忙の事と思ひます
殊に本年は有史以來の國難に遭遇し國民の輿論の統一に或は慰問品の蒐集にと御盡力下され誠に難有在滿諸兵士は安んじて國難に殉じ得るは一に諸君の賜と厚く御禮申上ます
申上ぐるまでもなく今回の事件は國民の進むべき道を開き下さるものにして實に我が死活問題なり滿蒙は吾が前衛線にして決して是を我國より離すべからざるは御承知の事と思ひます
夫を一部論者の軟弱外交の爲め吾が武人が莫大な犠牲を拂ひ漸く得たる權益を彼等外交官連中により正に其根底より覆返され吾々武人は切齒扼腕に堪へず其罪實に許すべからざるものあり
今回の理事會に於て然り吾外交官の現在支那認識不足の結果否外交官連中の支那の説明不充分は却て支那の逆宣傳に乗せられ辛うじて輿論其他により彼等説伏し得たる位にして彼等の手腕又信するに足らず
正義の伴ふ武力は決して暴力に非ず宜しく吾國は支那を玩味して然後之に適する最善の方法を選ば

待機致し居り、恰も滿蒙は嵐の前の静さを守つてゐます。近く日支軍衝突の空氣濃厚となり愈々緊張の日を送りて居ります
目下益々國民の輿論の統一を必要とする際、折角自重なされて國難に當られ度、遙かに内蒙の一角より御願申上ます。先は略儀乍ら厚く御禮申上ます。 敬具
東京市淺草區田町竹内産婦人科院の
永島喜美子へ鄭家屯より慰問品の禮
(六、一二、一九)

本日は御鄭重なる御慰問品澤山有難く御座います
陣中に於て皆様から下さる温い慰問品を抱き陣中の勞を慰する時こそ眞の吾々の慰安です。此の御厚意には一同感極り只御禮の二字あるのみです。此の二字はやがて報國の二字に變り吾々の任務の重且つ大なるをさとせませす
喜美子様御安心下さい。吾々は吾が國家百年の計を安んずる爲め滿蒙を死守致します
吾々は守備隊の者です。事件發生後吉林に、或は洩昂に、或は四平街へと轉戦し再び滿蒙に駒を進め鄭家屯の警備に任じ居ります
當地は馬賊共が多く殊に砂漠地帯多く、例の蒙古嵐に加ふるに水には尠なからず不便を感じて居ります。而し一同元氣旺盛御安心下さい。甚だ略式ながら御禮まで申述べ度候。時下日増に寒氣加はり殊に外交財政二大國難の折、折角御自重下され度遙かに内蒙の一角より御願申上ます。 敬白

ざるべからず。

今回の事件に於て然り莫大なる經費をかけ漸く滿蒙の實權を握り得たと云へ此莫大なる經費を誰れが補ふぞや、かく迄行詰りては努力多くして何等得る處なきは申す迄もなき事なり
而し吾人は既に過去を追ふべきに非ず現在を一步より以上進むべきに努力すべきなり見よ吾が滿蒙の廣漠なる曠野には彼處に一軒此所に一軒と云ふ如く是を開拓せば決して其富からず此富を開拓するもの青年諸氏に非らずや内地狭苦しい中に生活し生活難に苦むもの共を集め滿蒙に移住させ此不況を救ふ事又吾國の使命にあらざるや若人の滿蒙に進出の絶好のチャンスなり小生最近コンナ事を考へナントカ處することなからんかと目下支那研究中なり
今回の事件で實際の支那を見又味ひ得たる尠からず是を基礎として一身を捧げ曠野に屍を露すとも決して思ひ残す事なし希くば在郷の諸氏と共に緊揮一番難局に當らうではありませんか現在余の處研究したる支那事情あれば之を皆様に配布したいと思ひます
甚取りとめもない事のみ書き連ね不明の點多い事と思ひますが宜ろしく推察下されたい
甚だ潜越ながら憂國の燃ゆる余の微衷を傳へたいため申上た次第です
家内一同よりも非常に喜び居るとの報來り皆様の御厚意を重ねて御禮申上ます
尙ほ現在の余としては此不景氣に莫大なる金子を以て貴い皆様の慰問品より却て皆様の熱情にこそ

る御慰問状に満足して居ますから何卒團員諸氏にも其旨御傳へ下さい。

静岡市安東小學校高等科第一學年

本田加藤兩兒等の慰問に答ふ (六、一一、一二、一三)

本田君

御手紙下さいまして有難う。戰場に於て皆様から来る御手紙はどんなに嬉しいかわかりません。私等は事件發生以來支那兵の武裝解除に又は要地占領にと所々に轉戦し目下内蒙古鄭家屯と云ふ所へ来て鐵道警備に任じて居ります。當地は非常に寒くて皆様の想像もつかない寒さです。夜など歩哨と云うて門番に立つ者は毛の服を着て居つても一時間と居れば體がしびれて他人の體の様になります。

又極めて不便な所で兵舎には支那人の家を使つて居ります。それでも兵隊は寒いとか又は苦しいとかと云ふ事は一口も言ひません。是れは將來皆様方が大日本を建設するには満洲はどうしてもなくてはならぬからです。滿蒙は日本のためには人間の體で言つたら恰度咽喉の様に大切な所です。それから吾々軍人は死を決して守つて居るのです。戦争はまだこれから何時まで續くかわかりません。是れに勝つには日本は兵隊だけではとても勝つことは出来ません。日本人は老も若きも男も一丸となつて當らなければ到底だめです。何時皆様方が銃を持って國を守らねばならぬかわかりません。それには今より其の時に備へるだけの覺悟と決心が必要です。どうか其の固い強い決心

皆様は心配なく強い日本の女性となるべく一生懸命勉強して下さい。さようなら

鄭家屯より郷里友人渡邊美代志に滿洲の近況を知らす (六、一一、一二、一三)

謹啓

横暴極る支那兵の行爲は遂に今回の事件を勃發せしめ候斯迄吾が滿蒙を侵害するに於ては是を排撃するに非らずんば吾が國家百年の計を安ずる能はず再三再四警告を以て彼等に反省をもとめ候も却て聯盟等にたよりに是れを反撃致し候事茲に於て皇軍は遂に刃を以て逆賊學良を一撃せんと正義と國民の輿論を待つて開戦致し候一度皇軍起つや向ふ所敵なく素より支那兵如き問題に非らず候今や事件も本格的となり愈々吾々の任も重且つ大となり來り候

此の上は司令官の命に従ひ一死以て君恩に報ゆる覺悟に之有候間他事ながら御安心下被度候小生其後内蒙古に再度駒を進め鄭家屯の警備に任じ居候當地は馬賊匪賊或は敗殘兵愈々多く將來是等と一戦交へらるゝと楽しみに致し居り候錦州攻撃も近日に迫り緊張の日を送り居り候時下本年も餘す處數日相成り國民の輿論の統一を必要とする折柄何卒御自重の上國難に當られ度く遙かに内蒙の一角より御願申上候 不備

兄鶴吉の子供等へ昭和七年年始狀
あけましておめでとう

安東町柳新田從兄岩崎伯次郎へ

(六、一一、一二、一三)

を以て學業に又は仕事に或は弟妹の教育に奮勵して下さい。

先生や親達の言ふ事をよく守る者が一人でも多くなれば日本はそれだけ強くなるのです。是れと反對に、むだづかいや、けんか、なぞして學校に來ても、なまけるものが多くなれば多くなるだけ日本は弱くなるのです。どうぞ皆様は善良なる國民となつて日本を背負つて立つだけの素養を作つて下さい。

日本軍は今連戦連勝です。滿洲を平定し平和の日を迎へるのも餘り遠くはないだらうと思ひます。其の時は各々手を取り合つて新日本の建設に努力させよう。さようなら
君の最後の音信となつた軍事郵便の同様に届いたのは一月十日であつた。新年を許さず年賀狀がかくも悲しき思ひ出の糸口を引くものとならふとは、誰か知り得よう。

安東小學校第六年女組受持教師宛 (昭和七、一、一)

謹賀新年

奉天城外爆音一閃以來皇軍の前衛吾が滿洲權益擁護に戎衣を改むる暇なく萬物凍る陣中に新春を壽ぎ奉候
本日は數々の激勵の便り下され有難く厚く御禮申上候。故山の皆様方より下さる便りは唯一の慰安として拜讀するを樂しみにして居り候殊に幼き子供達の真心こもれる便りには一入感動致し候小生等も其の後内蒙より安奉線に歸還を命ぜられ目下安奉線の警備に任じ居り進出常なき匪賊共を相手に緊張の日を送り居り候

謹啓 滿蒙の天地に急變起り吾々守備隊出動の報一度傳はるや逸早く私達の爲め御慰問状を或は吾々武運長久を神佛に祈願下され誠に有り難く厚く御禮申上候御蔭様にて事件發生以來元氣旺盛其の後内蒙古四洮線附近に出動し目下四平街交通中學校内に守備隊司令官の豫備隊となり待期致し居り候情報に依れば吾が第一線部隊の戦況は有利に進展しつゝあり此の際正義の御旗を翻し歩武堂々爆進するのみに有之候
余は幸にして昨十四日より十八日迄第一線各々溪附近に軍需品輸送の決死隊に加はり内蒙古を北進し四洮線洮昂線に於て途中幾多の障害に會ひ辛じて第一線附近に到り其の任を果し親しく第二師團の戦績の跡を見餘りの戦場の慘たるに感慨無量に有之候
見よや吾が第一線部隊は糧食は缺乏し加ふるに慘々として寒氣と闘ひ居り今更日頃の整潔なるを後悔致し居り候
小生も及ばずながら國民の總意を背負ひ日増に加はる寒氣と闘ひ皆様の御期待に沿ひ奉るべく覺悟し居り候間他事御安心下され度候。町民各位余等の武運長久を祈り下さるとの趣き何卒小生に代り宜しく御禮申下され度候
小生も先般の重大任務にて死すものと思ひ居り候も幸か不幸か辛うじて餘命を長らへたるを甚だ遺憾に思ひ居り候時下日増に寒氣加はり候折柄御家内御一同様折角御體御大切に致され度候

杉山曹長の絶筆 (昭和七年一月十七日日付)

兄鶴吉へ三三頁寫眞参照)

今や事件は本格的となり錦州攻撃功を奏したりと雖も未だ豫断を許さず、當安奉線の如きは到る處に匪賊共の潜在し現に昨夜の如きは電線十二本、鐵道爆破等を行ひ列車の運行さへ自由ならず此れが討伐には尠ならず困憊し居り候、殊に當安奉線は山間多く吾が軍行動極めて自由ならざるに反し彼等匪賊は此れを利用して進出し爲めに吾れ等は出撃に出撃を加へ列車の運行は辛じて出來得るも何時爆破さるやも計られず、守備隊は移動警戒隊を設け全線を列車にて徹宵警戒し居る有様に之有り候、一同刻々として來る情報を見て緊張の日を送り居り候

甚だ略儀殊に亂書にて御返信申上度く外職員御一同様にも宜しく御傳言下被度候、時下日増に寒氣加り國民の後援を益々必要とする折柄折角御自重の上國難に當られ度遙かに異郷の陣中より御願申上候 二 仲
貴官受持級諸氏よりも慰問文下され有難く全級一同の子供達にも宜しく御傳言下され度候

安東尋常高等小學校

第六學年女子中島、永島等宛 (同年同月元旦)

謹んで新年を賀し奉り候

昭和七年一月元旦

滿洲守備隊

杉山 英

本日は結構なる御手紙下さいまして有難う。皆様より下さる便りを唯一の樂しみとして居ります、日本兵は目下連戦連勝ですから御安心下さい

(當々から死する覺悟を定めてゐたが戦死の前日即ち十一月十七日長兄へ便を書かれたといふ事は又「鳥が知らず」といふが奇しき縁を思はずには居られない。出動の當日非常にも忙しの中に家人への便りが途々絶筆となつてしまつた)

本日は結構なる御守り有難く、早速頂戴肌身難さずして居ります。其の後皆様も至極達者の由何よりかの事と思ひます。小生等其の後鄭家屯より安奉線の急を聞き急ぎ歸隊命令を受け去月二十八日頃安東に歸る何分にも安奉線には匪賊團多く吾々も匪賊討伐も數回行ひ随分危険な目にも合ひました。戦友も數名負傷したのもあり實に實戦と言ふものは御話にならん程苦痛のものです。去る十日の如きは約七百名よりなる匪賊と遭遇朝の二時頃より午後の七時迄食べ物一つ食はず而も前後一睡もせずと言ふ情況それに追撃を加へたが敵弾は用捨なく附近に飛來し來り平時に於ては想像だもつかない思ひを致しました。幸にして元氣益々旺盛なれば何卒御安心下さい。而し段々匪賊も討滅し來れば或は近く平和の日を向ふ事が出来る様になるやも知れず、だが安奉線はまだ數回討伐を行ふ筈なれば何れ又其の節情況御知らせ致します。亂筆を許されよ。長い事留守をしたため忙しい事話にならぬ。

では皆様御達者で、左様奈良
(此の手紙は戦死の前日十七日午前九時過ぎに出したものであつたが兄鶴吉氏の手が届いたのは戦死の電報の翌々日であつた)

安東縣朝日小學校兒童田中滿子へ
(昭和六年十二月)

満子様

貴女よりの慰問状今朝戴きました。
有難う我々も皆様に萬歳の聲で送られてより以來
奉天、四平街鄭家屯と轉々として我が滿蒙權益擁
護に國民の總意に沿ひ奉らんと、或は馬賊討伐に
或は鐵道警備にと奮闘致し、再び鄭家屯に來り鐵
道警備に任し居りますから御安心下さい。
一同元氣旺盛日頃の皆様の御厚意に報いんと一生
懸命です。
當地は安東と異り寒さも厳しく殊に馬賊共が沿戰
至る所に出没し少しも油斷が出来ません。
而し日本軍一度起てば向ふ所敵なく今や高く日の
丸の旗が翻つて居ります。滿蒙はもう日本のもの
ですから安心して下さい。私達は當分安東には歸
られません。御正月でも過ぎたらまたなつかしい
安東に歸ること、喜んで居ります。
安東も段々寒さも厳しくなりますれば折角御體を
御大切に遙かに内蒙の一角より御祈り申します。
さよなら

賞状

(杉山曹長の二等卒以來射撃成績優秀の賞状)

賞状

陸軍歩兵二等卒 杉山 英
大正十五年度第三回中隊特別射撃ニ於テ成績優秀ニ付茲ニ其名譽ヲ表彰ス
大正十五年十一月十五日

獨立守備歩兵第四大隊第四中隊長
陸軍歩兵大尉從六位勳五等田中信男

同

第四回中隊特別射撃ニ於テ其成績優秀ニ付茲ニ其名譽ヲ表彰ス
大正十五年十一月十八日

獨立守備歩兵第四大隊第四中隊長(以下同)

同

陸軍歩兵伍長 杉山 英
射撃優等之證
昭和三年十月二十六日

獨立守備歩兵第四大隊(以下同)

同

陸軍歩兵軍曹 杉山 英
右者昭和四年度大隊特別射撃ニ於テ其ノ成績優秀ナリ仍テ茲ニ之ヲ賞ス
昭和四年十月二日

獨立守備歩兵第四大隊長
陸軍歩兵中佐從五位勳三等山口金吾

獨立守備歩兵第四大隊長

同

陸軍歩兵軍曹 杉山 英
右者昭和五年度中隊特別射撃ニ於テ其成績優秀ナリ仍テ茲ニ賞状ヲ附與ス
昭和五年十月廿四日

獨立守備歩兵第四大隊第四中隊長
歩兵大尉從六位勳六等天津重雄

獨立守備歩兵第四大隊第四中隊長

同

(昭和三年歩兵伍長以來銃劍術成績優秀の賞状)

賞状

陸軍歩兵伍長 杉山 英
右昭和三年度大隊銃劍術競技會ニ於テ其成績優秀ナリ仍テ茲ニ之ヲ賞ス

昭和三年一月二十七日

獨立守備歩兵第四大隊長
陸軍歩兵中佐正六位勳四等山口金吾

同

陸軍歩兵軍曹 杉山 英
右大隊銃劍術優勝者特別試合ニ於テ其成績拔群ナリ仍テ茲ニ其名譽ヲ表彰ス
昭和四年一月二十六日

獨立守備歩兵第四大隊長(以下同)

同

陸軍歩兵軍曹 杉山 英
昭和四年度第二回大隊銃劍術競技會ニ於テ其成績優秀ナリ仍テ茲ニ之ヲ賞ス
昭和四年十二月二十日

獨立守備歩兵第四大隊長(以下同)

同

陸軍歩兵軍曹 杉山 英
右者昭和五年度第一回中隊銃劍術試合ニ於テ其成績優秀ナリ仍テ茲ニ之ヲ賞ス
昭和五年十二月八日

獨立守備歩兵第四大隊第四中隊長
陸軍歩兵大尉從六位勳五等天津重雄

同
陸軍歩兵軍曹 杉山 英
昭和六年度獨立守備隊劍術競技會選中豫選試合ニ於テ其成績優秀ナリ仍テ茲ニ之ヲ賞ス
昭和六年三月二十四日
獨立守備歩兵第四大隊長陸軍歩兵中佐
正六位勳五等板津直純

同
陸軍歩兵軍曹 杉山 英
昭和六年度獨立守備隊劍術競技會選手ニ選拔セラレ之カ特別教育ヲ受クルニ方リ精勵克ク其ノ目的ヲ達成セリ仍テ茲ニ之ヲ賞ス
昭和六年三月二十四日
獨立守備歩兵第四大隊長(以下同)

第六十四回兒童圖書調査採擇圖書

ネコトネヅミ 大木篤夫著 昭和六 一 尋一以上
チヒサナアカイヅキンサン 同 同 同
ヒツジトクリスマス 同 同 同
以上何れも繪新世界幼年叢書中の一書。學齡前後の兒童を對象とし、各一頁に文句を、一頁に繪を配し兩者相接つて注意深く親切に世界的な有名な話を紹介してゐる。低學年向の殊に學齡前後の子供の良書が乏しい折から恰好の著である。この叢書はこれ以外にまた三四冊發行されてゐるが今回は以上三書だけを調査採擇した。

少年伊藤博文公傳 中村金藏著 昭和六 一 尋六以上
十三篇に分ちて伊藤公の祖先の生立ちより説き起しハルビンに於ける最後までを據説す。公を背景とする時代史を緯とし之に經として公の傳記を織りこみ偉人伊藤公の全貌を浮ばせてゐる。程度はやゝ高きに過ぎるが尋六以上ならば讀みこなせるだらう。一度は勤めて讀ましたい本である。

少年伊藤博文公傳 中村金藏著 昭和六 一 尋六以上
熱血兒近藤勇の少年時代から其の末路に至るまでを幕末の風雲を描きつゝ述べてゐる。勇その人が又時代そのものが興味ある上に、所謂少年講談と銘打つただけに非常に面白く書けてゐる。尙今まで單なる一武俠とみられだ彼が智あり情ある眞の武士であつたことを力説してゐる。別に勤めなくとも子供が喜んで手にする本であらう。

動物の智慧 吉田助治、武井武雄著 昭和六 一 尋二以上
全部四十項目について武井氏の童書を主とし各種動物の話を興味深く述べてゐるから子供は知らず識らずのうちに引きづられて讀みゆくうち、動物に關する智慧を得るだらう。低學年向のよい讀物の少ない折からかう云ふ種類の書物は嬉しい。

昭和七年二月閱覽統計

冊 数	目 録	閱 覽 人 員		開館日数 二七	館 内	館 外	計	千分比
		別 業 職	別 後 取					
合 計	○總 記 一 宗教 哲學 教育 二 文 學 語 學 三 歷 史 地 理 四 政 治 法 制 兵 事 五 社 會 婦 人 風 俗 六 經 濟 商 業 七 理 學 工 學 醫 學 八 產 業 九 美 術 遊 藝 樂 藝 合 計	其 他	兒 童	一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七	一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七	一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七	一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七	一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七
		計	計	計	計	計	計	計

昭和七年三月二十五日印刷
昭和七年三月三十日發行

藝文庫下其事業第七十號
(特別號)

發行所

靜岡縣立藝文庫
靜岡市道手町二四八
電話一九五四番

編輯者兼

貞松修藏
靜岡市東草深一ノ五六

印刷所

深尾活版所
靜岡市富士見町二
電話一七九五番

印刷者

深尾新松
靜岡市富士見町二

終

